

# LA REVUO ORIENTA

1 9 3 7

JARO XVIII

N - R O 8

AUGUSTO

Nova Gvidlibro de Manĉukŭo



JAPANA ESPERANTO-ISTITUTO



卷頭言	久保貞次郎	283
國際文化とエスペラント	淺田	一 284
エスペラントと實業との結合について	磯崎	巖 287
國際會議 Esperanto en la Moderna Vivo 成功裡に終る	伊藤巳酉三	293
動詞 FARI の用法	小坂	狷二 295
“Ekzercaro” 中の句讀點の用法	岡本	好次 298
Antikvaj Literoj en Temija	脇坂	佳治 309
失はれた大地 (戯曲)	田畑	喜作 311
全國各地報道		318
エスペラント運動後援會第一年度會計報告		321
エスペラント運動後援會		322

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

## 財團法人 日本エスペラント學會

東京市本郷區元町一の一三

—【電話小石川(85)5415番— 振替口座東京11325番】—

目的	エスペラントの普及、研究、實用
事業	(a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表 (b) 雜誌及圖書の刊行及外國エス語書籍の取次 (c) 講演會講習會の開催及後援 (d) 其他本會の目的を達成するに必要な事業
會費	(a) 普通維持員 年額2圓40錢 (b) 正維持員 年額3圓 (c) 贊助維持員 年額5圓 (d) 特別維持員 年額10圓以上 (e) 終身維持員 一時金100圓以上
維持員へは	La Revuo Orienta を無代配布する他當會取次洋書の割引等をなすことあり
本會の	普通維持員を除く他の維持員はすべて國際エスペラント聯盟 (IEL) の普通會員 (simpla membro) となる
入會手續	住所 職業 姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい

會則及發行及取次内外圖書目錄要郵券二錢

### 役員名簿 (五十音順)

理事長 大石 和三郎	同 東郷部長 土 岐 善 廣	理事 常任) 三 石 五 六
同 元東北大校長 井 上 仁 吉	同 醫 博 西 成 甫	同 (同) 美野田 琢磨
同 井上 萬壽藏	同 藤 澤 親 雄	監事 醫博 鈴 木 正 夫
同 上 野 孝 男	同 監督局長 前 田 穰	同 堀 眞 道
ト (常任) 小 坂 狷 二	同 同 望 月 周 三 郎	同 清 水 勝 雄
同 中、教授 川 原 次 吉 郎	同 同 柳 田 國 男	同 高女校長 丸 山 丈 作
同 文 博 黒 板 勝 美	同 大 井 學	顧問 法博 徳 積 重 章
同 輕光局 田 誠	ト (常任) 大 井 學	同 子 三 島 章 道



# LA REVUO ORIENTA

Jaro XVIII

N-ro 8

Aŭgusto

1937

## 現 實 の 問 題

「私はザメンホフ博士の偉業に勿論敬意を表してをります。然しエスペラントが眞に國際語として現實に世界の國語を統一すると云ふことは理想であつて不可能と信じてをります。今日エスペランチストだけがエスペラントに關心をもち、かつ熱情をもつてをられることに敬意を表しますが、小國以外歐米に於てエスペラントによる作品の發表が自國語を凌ぐ域には達してをらぬ實狀に鑑みこれに充全の期待をもちません。……翻譯としてむろん日本文學をエスペラントで示すことに異議はありませんが、これの國際化といふことは英、佛、獨、西、伊語以上には到らぬと思ひます。」この卒直な見解は、一文學者が後援會で行つた文筆家問合せの「(2) エスペラント語は日本文學を國際的に紹介する爲に、適當な言語と思はれますか」に對して答へられたものである。

さて同志諸君よ！ この回答を讀んで私達は何を考へたらよいのでせうか。「これは甚だしつかりした考へだ。かう現状をハッキリ認識してかゝつて來られると、どうもタヂタヂだ」など感心し過ぎてはいけない。成程、かうした意見は、形式的にたゞエスペラントは人工語だから駄目だ、と否定し去る人々よりは眞面目であらう。しかしながら問題はそれだけで終つてゐるのではない。かういふ見解は知識人のなかに、殊に歐洲語をよく學び且利用してゐる人々の間に抱かれてゐる様である。

「小國以外歐米に於いてエスペラントによる作品の發表が自國語を凌ぐ域に達してをらぬ」ことは、私達の等しく認めるところである。「凌ぐ」どころではなく比較にならぬ程少量であることは、私達エスペランチストが、遺憾の心をもつて、知つてをる事實である。各國で毎年新しく出版される文學書は、千をもつて算へ、萬に達するかも知れぬ。一般の文獻としての書物を考へれば、數十萬であらう。ところで一方エスペラントの側では、新刊文獻總計が高々數十であり、百數十であらう。エスペラント運動の旺な日本でさへも、この二三年の様子を見ても十内外である。エスペラントによる翻譯文學が更に各國語に反譯されることも多々あるが、しかし之とて、各國語のこの方面の實績から見れば微々たるものである。私達が足を一度丸善に運び入れると、各國の書籍が、押しあひ、へしあひ育中をならべてゐる。各國語で書かれた堂々たる、分厚な専門の學術書が、又文學書が、自國の文化を誇るやうに立ち並んでゐる。これ等は各國で出版されたものゝホンの一部分だ。

歐米の文化を學ぼうとする人々が、各國語を知ることによつて受ける利益は莫大であることを目の前に見る。それからその足で本郷の日本エスペラント學會の文庫を訪れて見よう。エスペラントが發表されてから 50 年しかないのだから仕方がないにしても、戸棚數個の中にあるものが、舊いものから新しいものを一應集めた（勿論學會の文庫は決して充分な蒐集であ



るとは云へない) ものであると聞かされて、人々はこゝで元氣がとみに體から抜けて逃げて行くのを感じるかも知れない。

しかし、同志諸君よ！　そして又世の人々よ！　エスペラントの文獻が、又文學書が、現在、英、佛、獨、西、伊語等に比して少いからといつて、エスペラントの任務を少しでも——少しでもですぞ——軽く見ようなどとしたら、私達は大きな考へ違ひをしたことになるのだ。現状だけをみて、又極く短かい過去だけを顧みて、現實、現實、と叫ぶ人々は近眼なのだ。十九世紀の前半、プロシヤ王、ウヰルヘルム三世は、ヘーゲル哲學に優る哲學はないと信じた。『總て實在せるものは合理的であり、總て合理的であるものは實在せるものである』といふヘーゲル説を、彼は解釋して『總て現存せるものは實在である。故に合理的である。故に正當である』と。しかしながらこれはとんだ認識不足だつた。ヘーゲルにとつては實在は「必然」を含む。ヘーゲルの眞意は總て現存せるものが例外なしに實在だと云ふのではない。現存して同時にそれが必然的なところのみに實在性は生づるのである。

エスペラントが二十世紀の國際語として歴史の舞臺に登場して來たことには、當然生れべくして生まれた必然を含んでゐたのであつた。決してザメンホフ一人の言語的天才だけで生まれ育つたのではない。エスペラント語は將來益々必要な言語であることは、この歴史の必然から云つて餘りにも明らかである。ところで歴史の道から一寸おくれでゐる近視眼の文化人達は、今日の狀態が、充分でないからといつて、これがいつ迄も續くものと早のみしてゐるやうだ。エスペラントの作品の發表が自國語を凌ぐ域に達してをらないからこそ、益々、エスペラントに最大の期待をかけるべきである。嘗てダンテの師ラチニは自分の著「智慧の寶」を伊太利語で書かずに、フランス語を選んだ。マルコポーロの(伊太人)の「東方見聞録」もフランス語で書かれた。數十年前に日本の文部卿が本氣になつて、日本語の代りに英語をこの國にをきかへようと考を廻らした。ところで今日では日本の小さな町に住む人々の中で世界で唯一つ共通な補語によつて、自分の意見を世界の人々に向つて發表してゐる人々があるのだ。エスペラント語の文學書は今後益々増加するであらう。いや増加させなければならない。歴史に對してこの任務の責任をもち、振ひ立つて人々が働くことが巨大な歴史の流れの必然を示すものである。やがては、エスペラント語の文獻が、英、佛、獨、露、西、伊等の諸國語をはるかに凌駕する。

—Julio 20, 37 久保—

## 國際文化とエスペラント

HAZIME ASADA

今から丁度50年前即1887年7月14日にポーランドの天才ザメンホフ氏によりロシア語で書いたエスペラントの書物が初めて世に現はれた。尤もこの月日はロシアのジュリアン曆によつたもので我々のグレゴリ曆に換算すれば7月26日にあたる。

エスペラントといへば今日では説明するまでもなく何人も熟知してゐる中立國際語であるが、之は生れてヤツト滿五十年になつたわけである。

ラヂオにより飛行機により世界は益々縮少され、一國の經濟は世界の動きから獨立することの出来ない今日、各國の親善を阻害するものは民族の相違といふ點は固よりであるが、それよ



りも國語の相違といふ點が一層大なることが痛感される、現に英、佛、獨、西、伊、葡、バルカン諸邦などの民族が雜然と烏合してゐる北米合衆國も國語の統一によつてよく今日の強大を保つてゐる。四億の國民を有しつゝも地方々々で言語の異なる支那は強大となれない。

佛國の權勢強大なりし頃は歐洲各國殊に獨、墺、露などの宮廷にフランス語が用ひられ、外交用語は佛語に限られてゐた。英米の國力大なる今日では外交用語には英語が主として用ひられてゐる。

各國は殖民地には自分の國語を公用せしめ、土民の民族語使用を禁じてゐる。英佛の如きは對等の國家との國際會議にも自分の國語を以て臨んで居り、他の國家は之を甘んじてゐる形である。我國でも極端な日本主義者は日本語を以て押し通せといふであらう。然し我國語は歐米語とは語系を全く異にし、彼等に修得せしめる事は極めて困難である。之に反して歐洲の80餘ヶ國語は互に各々一種の方言の様なものである。だから之等の國民が互に他國語を修得することは我々が之等の語を學ぶのとは比較にならない程容易である。我々と歐米人との間には言語の上に於てかくの如き難關があるのである。この歐米人の間でさへ17世紀の頃既にデカルトやライプニッツにより國際語の必要が痛感され、又多少具體案も出された。國際語の要件としては1. 絶對中立 2. 學習容易 3. 正確合理的表現豊富なるを要する。今迄國際語は千以上も案出されたがエスペラントの右に出るものはなかつたしマックスミュラー氏も「エスペラントは20世紀の奇蹟だ」と云はれた。エスペラントはなるべく歐米に用ひられてゐる共通の語彙を取つて語幹とし之にエスペラント特有の語尾や接頭語、接尾語をつけて、僅16ヶ條で而も例外のない文法で規矩してあるのであるから歐米人には僅々數時間の勉強で讀める様になり、數週の練習で自由に話せる様になる。我々日本人でも一二の外國語を知つてゐるものならば同様である。外國語を全然知らない人でも1-2年も勉強すれば充分に役に立つ。自分などは英語に親しむこと四十年であるが英米旅行に際して宿屋や食事の役に立つただけで、視察に際しての説明を諒解することは困難であつた、之に反してエスペラントは大正14年5月以來1週間の講習を受けてあとは自習しただけで昭和2年海外視察に出かけた折に其エスペラントで各國を愉快に旅行し至る所に舊知のある感がした。

國語に對する自負心の強いフランスのバリー商業會議所も「國際語は明に人造語でなければならぬ」とし、其人造語としてのエスペラントの價値を認め、管下の商業學校に選擇科目としてエス語を教授し、諸外國との取引にエス語を用ふる事を推奨してゐる。

外國語を知らない人が先づエス語を學ぶと、其後必要があつて外國語を學ぶ時非常に樂であることは既に多くの實例がある。故新渡戸稻造博士も中學一、二年でエスペラントを課せばあと三年で初から五年教へるよりもより效果的に英語を教へる事が出來ると云はれた。我國の中等學校などで英語を強制するよりもエスペラントを正課とすれば語學の時間を短縮他にモット必要な科目を教へることが出來やう。

國際聯盟だの、オリンピックだの、其他の國際會議用語はさしづめエスペラントとしたいものだ。歐米人は自分の國語に對する自負心から、殊に英米佛國などは自國語を使ひ得る特權を棄てゝエスペラントを採用せうなどと云ひ出す筈がない。ポーランドや、バルカンのエスペラント仲間から屢々云はれた事だが、國際會議用語をエスペラントとすべく提言し得るものは日本において他にはない。

日本へ行くには英語を知らねばならないといふ事になり、獨佛人も俄仕込に英語を勉強して來るといふが若し日本に來るにはエスペラントを知らなければならぬと云ふことになれば、彼



等は甚だ樂に日本に來ることが出來よう。そして英米以外の國人は國籍のある英語を使ふ事によつて其國語的自負心を傷けられる事はなからう。皇紀 2600 年のオリンピックを控へた日本はエスペラントに精進して欲しかつた。今からでも決して遅くはないのである。

エスペラントは國際補助語として生れたものであるが、歐洲各國語からの翻譯には甚だ容易で且完全であることは佛國教育委員會でやゝこしい佛文よりのエス譯、又其エス譯から別人に佛語への反譯をさせた結果、同一の文章には復歸しなかつたが意味は少しも變つてゐなかつたことで證示されて居る。

初は創始者ザメンホフ氏以來、各國文學のエス譯が大に行はれたが、其後翻譯でなくエス語での偉大なる創作文學が出る様になり、科學界でも相當な論文が原著としてエス語で發表される様になつた。

學者は一般に其専門の學問に自負心があると共に自分の國語にも自負心が強い。フランスに留學した時、自分は教授にドイツ語の小論文を進呈したら、ドイツ文は厄介だから佛文に譯してくれと云はれたには驚いた。英獨佛あたりの大國の大學教授は他國語を知らなくても教職を完うすることが出来るのである。又それだけ國語的自負心がある。従てエス語など考へる人は少ない。日本の學者はどうも外國語崇拜の人が多く、國語的自負心はからつきしない。中立のエス語に對する情熱を有する人が少い。

困つた事にはエスペラントは猶太人ザメンホフ氏の創始である爲の人種的偏見から、又ソヴェートやスペインの人民戦線の様な赤色分子がエス語を利用すること多い爲の反赤色反ファシヨ的傾向からドイツのヒットラーはエスペラントを國外に放逐した。我國でも時々エスペラント仲間に赤い分子が出た事もあつてエス語運動は一時の様に振はなくなつた。然し之はエスペラントの罪ではない。國內には自國語を、國際的にはエスペラントをと高唱する純眞な理想家も澤山あり、創始者ザメンホフ氏は實に此理想の下にエス語を作られたのであつた。

ザメンホフ氏がエスペラントを創始した時は語彙僅に千であつたが尙よくプーシェキンの「吹雪」を譯するに充分であつた。今日では百般の科學の原著にもエスペラントが用ひられ、語彙は二萬以上に上つた。古い文獻のない科學では新らしく發表する人の語彙が其まゝエス語の語彙となるのである。尤もエスペラントをやる程の人はなるべく新しい言葉を作らず、作るとすれば止むを得ず、ラテン、グリーキ等の學用語に則つては作る筈である。我國では高空氣象學の大石和三郎氏の如きは多年エスペラントで報告を諸外國に送られ、同氏の作られた術語は世界で認めてゐる。自分はエスペラント語のみで業績を發表したのは 1922 年ダンチヒでの大會の時のみであつたが、其後教室員の研究業績を國語で發表した末尾にエス語抄録を附加して諸外國へ送つたがイタリーでは一々之を同地の専門雜誌にイタリヤ語で紹介してくれてゐた。又屢々外人の業績の末尾の文獻に此エス語抄録の載つた雜誌名が引用してあるのを見て欣快に感じてゐる。

我國の名士でエスペラントの趣旨を解し推奨せる人には徳川家達公、尾崎行雄氏、永田秀次郎氏、永井柳太郎氏、風見章氏等がある。

エスペラントの國際的總元締は多年 UEA としてスイスのゼネバにあつたが、其書記長クロイツ君の逝去と共に總元締は IEL として英京ロンドンに移つた。我國の日本エスペラント學會も之に加盟してゐる。英語は世界語と自負せる國の首都に中立國際語の本部があり、而も中々よく整つた事務所があり、毎週二回程の定例會もあり、日曜の教會堂の祈もエス語でやるほどの熱心さである。此堅實な人類愛主義的な總元締の下に世界のエス語の動きは今後左翼を抑



壓し、中正の道を進むであらうことを信じ且祈るものである。

エスペラントは生れて茲に 50 年を経過したに過ぎないが其間に長足の進歩をした。千年の歴史を有する一國の國語にも劣らぬ表現が文にも口にも可能であり、百般の科學を記載し、哲學にも文學にも水準線に達するものが生れる様になつた。各國外交官や國際從事者が自國語を他國に強ふるの非人道的なるを悟るの日もさう遠い將來ではなからう。我國の國粹主義者が國際的には中立語エスペラントを使用すべしと提言するの日もさう遠い將來ではなからう。其時に初めて世界中の眞の親善平和は確立するであらう。

## エスペラントと實業との結合について

### —来るべき記念大會の課題として—

Iūao ISOZAKI

#### 1

#### 實用化の必要

五十周年記念大會をひかえ、今迄最も看過され取り残されてゐた重要な問題として「實業分科會」を開催することが提唱されてゐる。この分科會に於いては眞に實のある成果が得られる爲に、その事業に關し豫め一般に十分研究論議される事が最も望ましいとの事で、先づその爲の捨石として、逡巡するゝまゝに、實業とエスペラントに關する愚見を披瀝して批判を仰ぐことにする。

さて、我がエスペラント運動は、本年この喜ばしい年を迎え、又數年後には日本に萬國博、オリンピック等の國際的催事を控え國際的關心は相當高まつてゐるにも拘らず、實は甚だ暗鬱な不景氣な時勢に當面してゐる。學會の會員數も書籍の賣上高も近年著しい下り坂を呈してゐる。この狀勢の打開はともかくとして、ぢつと悲境を喰ひこらえる方策は有るか無いか。これについて私も腦味噌の貧者の一燈を捧げたい。そして、我々この時勢に、「エスペラントは本當に有益だ」とゆうことが世人の爲に本當に實證されたなら、こんなに力強いことはないと思う。だから、エスペラントと實業の結び附きが實現され、或は少なくとも研究し始められたならば、我々はどんなに心強く、歡喜して事業に従事することが出来るだらうかと思う。

「エスペラントを本當に實用化す」この事は實に有意義な大事業だと思う。現在の社會で、發明は非常な大事業として人々は讃嘆するが、其の發明を産業化することは、更に一層困難な而も必要な大事業だが、其の功績につては普通の人々は割合に知らないものだと言ひ聞いた。エスペラントを創案しエスペラントを現状まで普及せしめた先人の功績は眞に偉大なものである。しかし、之を眞に人生に實益あるものとするには未だ遺されてゐる宿題であつて、この事は又前者に劣らぬ偉大な事業であると思う。

私の聞いた、1878年にドイツでバイエルが始めて人造藍の發明に成功してゐるが、机の上でこの發明を完成するには二三年の年月しか要らなかつた。それを實際に産業化し實用化したのには馬獅子會社が取上げ、約二十年の歳月を一千萬圓の費用、其の上、化學、機械、電氣、金屬材料、窯業等各方面の専門の知識を有する多數の人々の研究努力が必要であつたのだとか。



又、フランスのルブランは學士院の懸賞募集に應じて人造ソーダの製造法を發明し一等賞を取つた。しかしこれを實用化することにはすつかり失敗して 1806 年頃パリの養老院で淋しく死んだ。そのルブラン法はその後三十年経つて、やつとイギリス人によつて工業化され、イギリスを世界一のソーダ供給國にした。ドイツのデイゼルはデイゼル機關を發明したが、その工業化に失敗し、大西洋上で身投げして死んだ程だ。空中窒素固定法のハーバーの發明もボツシュが現れて、始めて實用化した。こんな例を求めれば限りが無い。

國際語のザメンホフの發明も、無數の後輩の知識や努力を綜合することによつて現在の地位に到達することが出来、今では相當に實用的効果を上げるようになってゐる。しかし乍ら、人造ソーダやデイゼル機關の實際の利益は何人もが感ずるが、エスペラントはまだそこまで達してゐないのではあるまいか。我々は馬獅子會社やボツシュ博士の様に先人の業績を實用化す爲に、資財と勞力と歲月とを十分に費す覺悟が必要なのではあるまいか。そしてこの仕事は我々後輩の義務であると思う。

## 2

## 如何なる生活部門を狙うか？

エスペラントの實用化の大切な課題を我々は今自覺して取り上げよう。さて、人間生活には色々な部面があり、また、色々な地位や立場の人があつて、實用とか實益と言つても、非常に相違や喰違ひもあり、仲々面倒だ。ある時代のある人々は、政府にエスペラントを公認さすことで問題が解決する様に思つたり、またある人々は、學者の最高の會議で推せんすれば片附くように思つた時代もあつたが、又一方そうでなくて、夫々専門の仕事に實際に使つて、効果を積むことが必要だとの考へがある。現在では、公認とか推せんとかを獲得する道よりも、人々の生活の間に實績を積むことが基礎的な道であることは一般に理解されて來たようだ。イドの反逆に對してエスペランチストが採つた「我等科學は自分の畑を耕そう」とゆう道は根本的に正しい、それで日本のエスペラント大會でも第十一回以來大抵専門別の分科會を持つて、夫々特殊部門に關してのエスペラント事業の遂行が討究されるようになった。しかし、それでもまだその種類はキリスト教、佛教、文藝、科學とゆうように精神生活の方面のが多くて日常の實生活の方面はまだ少ない。(鐵道、婦人の分科會、教科書問題審議會等、次第に盛んになる傾向ではあるが) やはり運動そのものが元來理想から出發して來たので、現實的な事は精神的問題より後くれてゐるのだろうか。

これ等の科學藝術等の部門は無論、高尚なことであるが、一方衣食足りて禮節を知る、とゆうように高尚な人間生活の卑近な土臺には、日常の衣食住等の物質的事項が現實に存在するのである。そして、エスペラントを、高尚な文化の先端で勝利せしめようと思ふなら、將を射んと欲せば馬を射よ！ で、この物質的實利生活の急所を射ておかなければならぬと思う。

この物質方面の生活とは、我々の經濟生活つまり、職業等の生産的經濟生活、家庭での衣食住等消費的經濟生活であると思う。この方面へのエスペラントの侵透はまだまだ大變少ないのではあるまいか。

## 3

## 實業的實用の事例

この經濟生活に關するエスペラント事業の今迄の状態をざつと見渡して見よう。



消費的經濟生活については、ポーランド、北歐等の熱心な消費組合運動へのエスペラント利用がある。運動の報導や、消費組合精神での國際的機關誌も出てゐる。その他、素食主義、禁酒事業、自然生活、簡易生活等の運動にエスペラントが教育的意味で用いられてゐる。

この方面の事例は日本では非常に少ない。岡山の禁酒會館が徽章にエスペラントで Abstinenco と入れてゐた。消費組合では大阪の共働社で十四五年前福田國太郎氏がエスペラントを教えた、近年東京では清見陸朗氏が消費組合事業に参加したことがあり、落合消費組合が米村氏、吉祥寺の消費組合で高谷氏が兒童の日曜學校でエスペラント教育を計畫したことなどあつた。未だ外國から共同購入とか、外國の經驗を學ぶ等の事は餘りない。

生産的經濟生活方面では、先づ水産、林産、牧畜等ではエスペラントに關する事を未だ餘り聞かない。阪川牛乳店の純良バターの例はあるが。農業では、ローマの國際農業協會がエスペラントで世界の農業調査をやつた事がある。農業收益計算の本がエスペラントで出てゐる。ロシアには進歩した農藝學者の研究室にエスペランチストが居て業績がエスペラントで伝えられてゐる。臺灣では日本の農林技師の研究報告がエスペラントで出されてゐる。ハンガリーでは農民美術の本がエスペラントで編纂されてをり、デンマークでは農村青年の國民高等學校で盛んにエスペラントが教えられてゐる。日本では農林學校には段々エスペランチストが存在するが、相互の連絡もあまり無いようだ。菊の栽培家露木氏が菊のことをエスペラントで書いてゐる。ブルガリアの農事試験場の同志がとうもろこしを送つて來る例もある。静岡の農村青年共働學校で中垣氏がエスペラントを教えた。紀北實踐女學校でもエスペラントが教えられたが生徒は農家の人であろう。

農林業關係では、研究の報告に、品種の交換に、産物の取引に農村青年教育に、等々エスペラント利用の餘地は多い。

鑛業に關しては餘り知らぬ。冶金では八幡製鐵所にエスペランチストが少なからずあつた筈だが、職業との關聯が出來てゐたかどうか知らないが、工業では日本では高橋邦太郎氏、小坂狷二氏、櫻田一郎氏、美濃田琢磨氏、桑原利秀氏等々有力なるエスペランチストで工業の専門家である人も少なくない。國際動力會議、國際工業會議の際などエスペラント文の報告書、又はエスペラント問題の主題等提出した。電氣雜誌オームには毎號小坂氏執筆のエスペラント欄あり、工業界の記事が掲載されてゐる。

エスペランチストの科學協會、電氣エスペラント會、藥學エスペラント會等、産業に關係ある技術家の團體がある。鐵道エスペラント聯盟も有力な組織である。根本氏が術語の研究を續けてゐる。

航空關係では、フランスでは古く、フアルマン氏がエスペラントをやつた由、日本では栗屋海軍大尉、臺灣の謝文達氏等あつた。フランス及びロシアではエスペランチストの飛行家が段々あるようだが、航空關係者の團體があるか否か知らない。

航海には、海員術語字典が出來てゐる。海軍にエスペランチストが各國共段々あるようだ。日本でも大場大佐があつた。かつて、イタリー砲艦長アレシオ大佐が神戸に來たことがあり、今回フランス巡洋艦ラモットピケの乗組水兵の同志がアルゼンタ、クンシードを訪れた。船員のエスペラント運動は日本でももつと盛んになり得るであらう。

觀光事業、旅行關係ではエスペラントは比較的よく使はれてゐる。

既に以前にトーマス・クック會社がエスペラントで漫遊切符を出したこともある。現在各國でエスペラント文案内書を出してゐるのは枚舉に違がない。旅館、料亭等でエスペラントを使



用するものも少くない。日本でも京阪食堂、其他喫茶店のエスペラント名は澤山ある。

だが、観光事業へのエスペラントの利用はまだまだ今後大いに餘地がある。

商業には相當實例がある。國際見本市にエスペラント文の貼ビラ、案内書等を作り、通信にもエスペラントを使つてゐるところは、パリ、マルセイユ、リヨン、バトバ、バルセロナ、ウイン、ブタペスト、其他少くない。しかも、見本市へのエスペラント文の通信は年々増加してゐることはその事務局發表の統計によつて知ることが出来る。エスペラント名の商品も決して少くはない。時計の Movado, Hanco, Cervo, Esperanto 万年筆やウイスキー、ハーモニカのノープ等があり、日本でも一寸數え切れない。調味料ボングスタ、臭氣消セードリギーロ、眼帯サーナ、睡眠劑マテーノン、治淋劑クララ、癩病藥エクルーモ、寫眞機附屬品マルペーザ及レクタ、ヴェント號自轉車、仙臺で出來た菓子、京都ではチョコレート、三重久居では緑茶がエスペラントで賣出された等。特許事務所の吉田太市氏の調査によれば日本帝國特許法による登録商標となつてゐるエスペラント名は第 6 類 7 類等二三部門のみでも數十件に達してゐる。廣告文説明書をエスペラント文で作製してゐるのは最近ドイツの某モーター、日本ではかつてのエスペル療法、花王石鹼、ネオザール、ミツワ寫眞糊、坂川純良バター等調べれば相當あるようである。營業にエスペラント文の通信を實行してゐる商店は外國では以前から可成な數があり、日本でもぼつぼつあるようだ。日本エスペラント協會時代の有樂社、近くは旭光社上野商事、震災前横濱にあつたエスペラント貿易商會、名古屋の山田氏、三重の久居の工藤商店等がある。東京では現在、山里氏等の國際産業通信、西村氏のゼット万年筆等商用通信にエスペラントを實用してゐる。屋號にしたのは外國でも色々あるたらうが日本だけ見ればエスペラントに因んだ日本語名の福岡のみどりや、大阪の古い阪上氏の星光社、エスペラント名では神戸の喫茶店の元祖、元町のエスパーロ、東京のノープ、エスパーロ、ヴェルダ、ビヤホールエスペラント、モンド等々仲々澤山ある。其他看板や注意書をエスペラントで出してゐるものもぼつぼつ殖へてゐるようだ。古いところでは中央氣象臺、岡山縣商品陳列所、星光社印刷所、近頃では京都のこまどい、京阪食堂、東京の光ヶ丘内科、梶齒科醫院等。

公私の團體や組織でエスペラントを使用してゐるものは、ロンドン、パリ、ブカレスト等の商工會議所、かつては北京の停車場、各國の見本市事務局、日本では岡山の商品陳列所、その中にエスペランチストが居てエスペラントに好意を寄せ、この語で通信の出来る商業關係團體や機關としては、東京府商工獎勵館、岡山商工會議所、岡山産業協會、東京の商業美術協會、大塚方面館等がある。

歐洲戰亂の直後、商業にエスペラントの使用を促進する爲の機關として、ロンドン及パリの商業會議所が主唱して創つた共通商業語委員會が日本にも紹介され、横濱に日本のその委員會が設立されたが、今は存在しない。

商業教育に關しては、イギリス、フランス等では商業用エスペラントの教科書が出版されてをり、日本でも三重の商業學校の梶先生が簿記の教科書を著してゐる。かつては東京高商、東京商大、大阪高商、神戸高商、關西學院、横濱商業、小樽高商、大分高商に有力なエスペランチストが居り、エスペランツ會も組織されたりしてゐたが。神戸市立若菜商工學校では夜學にエスペラントが教授された。

商業上の出版物では、外國ではアメリカからエスペラント文の商業新聞が出たことがあり、現在では Bulteno de Internacia Scienca Asocio Esperantista が科學、工業、商業雜誌との副標題をもつて發行されてゐる。日本ではかつて、横濱で出てゐた World Salesman 誌がエ



スペラント欄を持つてゐた。外國では尤大た電信暗號簿がエスペラント文入で發行されてゐる。ライブチツヒの見本市の事務所が商品名簿をエスペラントで出してゐた。ルーマニアのブカレスト商工會議所はエスペラント入で詳細な商工人名録を出してゐる。ドイツでは現在、商業同盟が再興され雑誌 Komerco を出すことになつてゐる。エス文での商用照會類は地方の商工會議所の機關誌に發表される特約をしてゐる。日本では英文貿易雑誌ニッポン、ガイドのエスペラント附録が今年から出され、海外に反響を呼び起してゐる。

金融方面では歐洲戰前ロンドンやスイスにはエスペラント小切手銀行が出來、その小切手は一種の國際通貨としてエスペランチスト人には盛に使用され、スイスの一般銀行もそれを受け附けるところまで行つてゐたが、歐洲戰の影響で世界の爲替の動搖等の爲、それは閉鎖されてしまつた。

娛樂的營業では前記、喫茶店、カフェー類には相當あるが他の方面は微々たるものである。かつて神戸が宇部だかの映畫館の週報にエスペラント欄が載せられてゐた。エスペラントの活動寫眞は、仙臺大會等の實物が少しあるに過ぎない。かつて宮下氏の發案でマルタの映畫化が計畫され、プロキノの松崎氏はプロ・エス講座を映畫化した教育映畫を作つたらとの意見をもつてゐたが實現しなかつた。蓄音機レコードはエスペラント語學物及エスペラント歌の他に一般的に藝術價值のあるカルメン及リゴレットの曲が獨逸で吹込み賣出されている。日本では進藤氏の努力で内野氏の聲樂によりタンホイゼルを吹込んだが賣り出すに至らなかつた。次に、流行歌は多少翻譯され歌はれてゐるがこの營業はまだないようだ。浪花節は北海道の某氏が巧妙にエスペラントで唄うそうだが、これも營業的にやる人はまだない。浪花節の大家壽々木米若が洋行して來てから、しきりに、この日本の叙事詩藝術の海外進出を考え出し、浪花節雑誌「藝一報」がエスペラントによる進出を論じてから、米若は大いにエスペラントで浪花節をやりたい意向であつたそうだが實現までには到らなかつた。近くは玉川勝太郎が今年はエスペラントを習得して浪花節の國際大放送をやりたいと言つて學會に入會した。

文化的營業の他の一分科として出版業がある。エスペラントの語學上のものでなく、藝術、科學等に實用した出版は、外國では相當あるやうだが、儲る程でもあるまい。日本では以前日本エスペラント協會の *Japania Esperantisto* を學術的日本紹介文化雜誌にしようとして失敗した例がある。フィンランドの *Esperanto Finlando* もそうであろう。日本では其他カニヤ、梶氏やヤマト出版等があるが、日本の文化紹介等の出版がともかく收支償うとのことである。露木氏が日本美術史其他を書いてゐる近く出るはずである。

ラヂオ及新聞通信等にエスペラントの實用されてゐる例も決して少くないがそれ等の事例は別の機會にゆづる。

#### 4

### 時 勢 と 實 用

先づざつとこんな實狀にある。一見相當賑やかでもあるが、まだ、營業者産業行政の中心機構に喰ひ行つてはゐない。次第に進んではゐるようではあるが、又一面既に獲得した成果さえも失つて行く部面も決して少くない。そしてエスペラントの實用問題については悲觀論者が割合に多い。少なくとも當面は消極説が壓倒的である。ついては一般の世相と關聯して考える必要があるが世の中の仕組を解剖し、その動向を察知する必要があるのであろう。それは餘程大問題なので、課題として提出して人々の研究をまちたい。ともかく一面に於いてエスペラントに



不利な様な形勢が現れても、結局その反面には有利な事情が起つてゐることを確信していゝ。古來の日本流の一枚の眞帆では逆風の時に進めないが、巧妙複雑な片帆で上手に風をまぎつて進めば逆風でも航海が出来るのだそうだ。エスペラント運動もまた世間の風をまぎつて進むことが出来るに相違ない。今は世界中國民主義が旺盛で、國際的な企ては受難時代だと言う人もある。しかし、最近の事情はエスペラントの必要を増大して來てゐる様だ。各國が對抗的な封鎖經濟の傾向をとれば、なおさら、親善の爲の交渉、努力は必要であり、各後進國の文化や言語も尊重しなければならず、益々新商品の紹介も必要であり、僻遠の小さい新市場の開拓さえも重要となる。觀先産業の如き新産業の開発も大切であり、海外の嗜好や風潮を個別的に詳細に調査することも必要となる。産業や教育上の外國の成果には一層注意して、日本の實業教育等も建て直さなければならぬ。これ等の方面には實にエスペランチ、トの貢獻が深く期待されるのである。

## 5

## 如何になすべきか

さて、上記の事情を考え、我々は今如何なる仕事をしたらよいだろうか。

(1) 我々はまづ何より、エスペラントは究局、實益を上げ得るとゆうことについては確信をもたなければならない。そしてこの實益の實現の爲の努力を拂うことによつて外部からの支持もあり得るのであつて、この實益の爲に奉仕するとゆう態度を採ることが必要と思う。

(2) 最後の成功とゆうものは、何も日常目先の實益の範圍ではないであらう。しかしその高尚な理想の爲には卑近な實益の爲に盡すことは必要である。しかし卑近なりと雖も實益の實現は決して容易なものではないことを覺悟しなければならぬ。そして實益實現の爲のあらゆる試みを逡巡することなく行つて見ることであり、又、絶えずこの爲の研究を續けるべきだと思ふ。

(3) この目標の爲に立場や考える同じうする人の力を結合することが必要である。ドイツでは商業同盟とゆうものが作られてナチス治下で着々成功を収めてゐる。日本でも、學學内に専門の委員會を作るとか、獨自の聯盟を作るとか、衆知衆力を結合する方法が必要であり、又全世界の賛成者との提携が必要であらう。

(4) エスペラント界外部の實業界は龐大な機構であつて、そこには色々な立場、色々な考への人が居り、特に實利に敏感嚴密だから、口で説法した位では仲々陷落する筈がない。だから我々は誠實に實際に、エスペラントを使つて、商品を紹介して見せたり、嗜好や市況を調査報導して見せたりして、實際の効果と誠實な奉仕とで説得しなければならぬと思う。

これは岩下氏の提案だが、例えばエスペランチストが連帶負擔して新商品の無料紹介の Bulteno の様なものを繼續して發行し、その反響を生きた證據として實業家を説得する等。

(5) 色々な營業を持つてゐるエスペランチスト達の相互援助が實現されると有効だ。例えば、エスペランチストの各營業を網羅した百貨サービス聯盟の如きものを作り、聯盟員又はエスペランチストは成る可くこの聯盟加盟の同志の店を支持し、顧客となり、またその店は同志達には若干の便宜を計る等のことだ。今迄でもそれは多少は行はれてゐたが今後はつきりさせて方針とすることだ。

(6) 將來の實業家を目標とした實業教育に注意を拂う。從來でも普通の中學校よりは職業學校的方面にエスペラント教授の可能性も成果も多かつた。若菜商業學校、神尾看護婦學校、



紀北實踐女學校、農村青年共働學校、盲學校等その一例だ。將來學者にならうとするのでない職業學校の生徒達にはエスペラントは實踐上好都合だ。ハンガリー、デンマーク等で農村青年學校にエスペラントが入つてゐるのはもつともだ。日本でもこゝに注意して狙打ちする必要がある。又、商業美術協會や包裝美術協會の様な實業的文化團體にエスペラントを導入することは有意義であらう。各國の廣告圖案蒐集したり、商業美術の國際會議等に使つたり、エスペラントの實用の途は廣いだらう。

(7) 早速だがエスドランチストの實業人名録が作られることが必要だ。外國に知らせる取引を開始する爲にも、エスペラント界内部に百貨サービスの相互援助を實現する爲にも必要だ。

實業關係の術語集も追々編纂されなければならぬ。

以上の如く、根本的に考えても、目前の事を考えても、實業エスぺランチストが協同して、實業エスペラント運動を始めることは大變に必要なことだ。本年中には實業エスぺランチストの團體が組織され、又大會に實業分科會がもたれて、この運動が開始されるなら、五十年祭の記念に最もふさわしい有意義な事業となるであらう。

## 國際會議 Esperanto en la Moderna Vivo 成功裡に終る

Kiuzo ITO

1937 年上半期に於ける Esp. 界最大の出来事は巴里の萬國博覽會の附帶事業として開催された國際會議 Esperanto en la moderna vivo である。

この會議の使命は Esp. が最早机上の空論ではなくして、現に凡ゆる國際的事柄に實用されてゐること、又國際語問題は既に Esp. によつて解決され、國際語即ち Esp. であることを世界に示すにありとされてゐる。従つて茲に討議される事柄は凡ゆる文化の部門に互り、現在までに得られた成果を調査確認し、今後の普及方針を定めるものである。

會議は4部門に分れ、各部毎に著名 Esp-isto の専門家を委員長とする準備委員會を構成して、次の様な諸方面に對する詳細な質問事項を作成して夫々適當な個人、團體等に回答を求め、集つた回答を纏めて討議材料とした。

### 第一部 學校と Esp.

1. 初等教育に關する件。2. 中等教育に關する件(普通教育、専門教育)。3. 盲聾啞者教育に關する件。

### 第二部 國際運輸

1. 商業、工業。2. 工業關係の私有物(特許發明等)。3. 國際見本市。4. 銀行と株式。5. 關稅。6. 鐵道、航空、海運。7. 遊覽、觀光。8. 郵便、電信、電話。9. 警察。

### 第三部 科學、工學

Esp. 使用の實狀と普及方法

### 第四部 知識交換

1. 文學。2. ラヂオ。3. 劇。4. 映畫。5. 法律。6. 宗教、哲學。7. 學術雜誌に關する件。8. 圖書館。9. 速記。10. 美術。11. 高等教育。

茲に特筆すべきは準備委員會の懇請により、佛蘭西教育大臣 Jean Zay 氏は學校に Esp. を導入する件に就き公式實驗を行ふことを許可し、技術教育局長 Luc, 初等教育局長 Roasent, Besançon 大學長 Parisella 三氏の指導監督の下に、諸中學校及 Besançon 時計工學校では、直ちに特別講習が始められた。

さて會議は5月14-17日盛澤山のプログラムの下に開かれたが、總裁には大統領 Lebrun 氏を戴き、首相 Blum 氏、下院議長 Herriot



氏以下 14 名の大臣、次官を名譽委員に連れ、前巴里商業會議所會頭 André Baudet 氏を議長、Ernst Archdeacon, Louis Bastien, Jean Couteaux の三氏を副議長、P. Petit 氏幹事長、C. Rousseau 氏會計主任と、最も著名な Esp-isto を集めて豪華な顔觸れである。

5 月 15 日午後 2 時半シャンゼリゼ劇場で開會式が舉行された。佛國政府代表技術教育次官 Jullien 氏司會者として出席し、30 國よりの參加者 700 名、オーケストラ、大コーラス團が會場に滿ち、先づ Jullien 氏の開會の辭に續いて國歌 La Marseillaise が演奏され、Baudet 氏は政府代表、其他參加者に感謝の演説をなし、次に Jullien 氏は立つて、Esp. が實際に各國語と並行して使用されてゐる事實を認め、Esp. が世界平和に貢獻する所大なりと力説した。その後オーストリア、リトヴィア、カタロニア政府代表の挨拶があり、最後にベートヴェンの第九交響曲のフィナーレと Espero が奏されて式を終つた。尙この開會式はラヂオで中繼放送された。

夜は劇の夕で、最初 Lidija Zamenhof 嬢の Cseh-metodo による Esp. 講習の demonstracio があり、次に La Verbo Ami の第三幕及 Kion diri pri ĝi? が上演された後、諷刺作家として知られる Raymond Schwarz が特に會議の爲に自作したレエヴー Nek-Nek が演ぜられて大好評を得た。

16 日は主として各部會があり、その間に講演 Mesny 氏の「霧中航空機の着陸」、Cotton 氏の「短波長電波」Rienzi 氏の「美しい佛蘭西」があつた。

又巴里の Esp-isto 等撮影の映畫 Antaŭen が映寫された。同映畫は三部から成り、第一部は佛語も Esp. も知らない外國人が巴里に来て種々の困難に遇ふが、遂に Esp-isto が現れ數分間で Esp. を教へて不便から救ふ。第二部は巴里の Esp-isto の宴會、遠足等 Esp-isto としての生活を示したもの、第三部は戦争の悲惨と平和の美しさを示したものである。

17 日、午前は各部會と Gerardin, Dejean 兩氏の「高速度映畫」、Alberich 氏の「スペインの新文化」の講演があり、正午有名な巴

里の森 Bois de Boulogne の Dauphine 莊で公式宴會が開かれ遞信大臣 Jardillier 氏司會の下に豪華な午餐が供された。

同日午後 5 時 Bastien 將軍司會の下に閉會式が行はれた。各部會の報告があつた後幹事長 Petit 氏は次の決議を提出して一致承認され、歴史的この會議の幕は下された。

La Internacia Konferenco „Esperanto en Moderna Vivo“ kunveninta en Paris, 14-17 majo, sub alta patronado de s-ro Albert Lebrun, Prezidanto de la Franca Registaro, en la kadro de la Interuacia Ekspozicio „Artoj kaj Teknikoj en la Moderna Vivo.“

Konsiderante, ke la moderna vivo postulas interkomprenilon inter la diversaj popoloj,

ke la internacia helpa lingvo Esperanto prezentas ĉies meritojn laŭ pedagogia, praktika kultura vidpunktoj,

petas la Registarojn:

—enkonduki devige la lernadon de Esperanto en la lernejojn por la lernantoj 12-14-jaraj, kiel lasta paŝo por la unuagrada instruado (plibonigo de la instruado de la gepatra lingvo kaj ebligado de interkompreniĝo kun la aliaj popoloj) kaj kiel unua paŝo por la duagrada instruado (preporado al la lernado de la fremdaj lingvoj).

各部會の報告に就いては未だ詳細が發表されてゐないが、主な事項は次の通りである。

#### 第一部

Esp. を小學校の必修科目とし、中等學校では外國語習得の基礎として第一學年に於て隨意科として教授すること。盲學校其他の特殊校では 1 乃至 2 年間必修科とすること。

#### 第二部

鐵道各驛で Esp. 講習を行ひ、Esp-isto は勤務中必ず綠星章と Esp. と記した印を付けること。(この件は佛蘭西の鐵道では實現された)。

#### 第三部

工學術語を統一し、國際記號を制定すること。工學雜誌を一つに統一すること。理工科學校では Esp. を必修科目とすること。

#### 第四部

知識交換は Esp. 無くしては行はれ得ないことを認めた。又大規模のラヂオ協會を設立し、各國に支部を置くことを決定し、實現工作に着手した。



## 動詞 FARI の用法

(16)

K. OSSAKA

§8 (a) FAR, IĜI, uzata kiel Neŭtra Verbo, t. e. Nekompleta Netransitiva Verbo, akompananta ĝian predikaton, estas ekvivalenta al la neŭtra „iĝi“ (=ekesti, estiĝi, fari sin esti): 『(何)になる』。

{ Li estas malsana. 病氣である。  
 { Li fariĝis malsana = Li ekestis (=estiĝis, iĝis) malsana = Li malsaniĝis. 病氣になった。

Kelkaj ekzemploj:

Estas domaĝe, ke vi ne fariĝis generalo. (Rt 21/3) お前大將にならなかつたのは惜しいものだ。

Vi devas fariĝi granda homo. (BV 22/22) 大人物にならねばいけない。

La juna vidvino fariĝis denove fianĉino (=denove fianĉiniĝis). (F 71/-2) 若い後家さんにまた嫁入話が出来上つた(川柳に所謂: 赤い信女が子をはらみ)。

La verda stelo ĉesos esti malkuraĝa signo de silento, ĝi fariĝos signo de laboro. (OV 379/35) 緑星は沈黙の卑怯な徽章ではなくなり活動の徽章となることでありませう。

Tiam vi fariĝos via propra sinjoro. (FII 74/15) さうなればお前も獨立出来る(自前になれる)。

Sed ne rigardu tiel acide, ne rigardu min kun abomeno. Mia nazo ne fariĝis renegato (Rn 45/10) さう若々しい顔付をなさんな、さうさげすんでわしを見なさるな。わしの鼻が何も背宗者になつたわけぢやあるまいし。

Vi fariĝi ofero de lia intrigoj, sklavo de lia volo. (BV 57/-9) お前は彼の奸策の犠牲、彼の意志の奴隷になつたのだ。

Ni ja povas fariĝi objekto de atento por ĉiuj veturantoj. (FK 125/14) 吾々は乗客達の目をひく(人目につく、注意の的になる)かも知れぬ。

Vi fariĝos objekto de mokado. (Rz 96/-1) 物笑のたねになるぞ。

Ĝi fariĝis por mi osto en la gorgo. (P 231) 私にとつてはのどにささつた骨になつた(とは邪魔になる、目の上のたん瘤になる意)。

Ĉesis esti vino, sed vinagro ne fariĝis. (P 769) 酒ではなくなつたが然し酢にもなりきらぬ(即ち沈香も焚かず屁もひらず、どつちつかずの意の proverba esprimo. 主語は略されてゐる)。

Per mono eĉ silento fariĝas elokvento. (P 549) 黄白を以てすれば沈黙も雄辯となる(即ち地獄の沙汰も金次第、萬事金の世の中の意)。

Kiu naskiĝis sciuro, ne fariĝos vulturo. (P 303) 栗鼠として生まれたる者は鷹にはならぬ(瓜の蔓にはなすびはならぬ、お玉じやくしは蛙の子に當る諺)。

Malpaco pro limo fariĝas kutimo, malpaco pro kredo fariĝas heredo. (P 400) 領域の争は慣習となり、信仰の争は世襲となる(國と宗教とのいさかひは昔から絶えぬ)。

La dukto fariĝis fine malpacienca (=iĝis malpacienca, malpacienciĝis). (FK 144/11) 侯爵はとうとうしびれを切らした。



La ĉielo *fariĝis* sune hela. (FIII 123/-4) 天は陽の如くにかゞやいた。

Vi *fariĝas* tro libera. (GD 23/9) あまりづうづうしい。

Pro tio mi *fariĝis* saĝa per mia propra kostopago. (GD 5/10). それでおれも目がさめたので(自分の失費で、即ち自業自得でひどい目に遇つて利口になつた)。

Ŝia karaktero en la lasta tempo *fariĝis* pli forta kaj pli serioza, pli simila al la karaktero de ŝia fratino. (BV 36/22) 彼女の性格は近頃だんだん強く落付きが出て、姉さんの性格に似て來た。

Ni elatendis la tempon, kiam la vojoj *fariĝis* liberaj. (Rt. 62/18) 道に邪魔がなくなゐる時まで待ち通した。

Kviete! Kviete! nia hetmano *fariĝas* ruĝa kiel fajro. (Rt 87/5) 靜かに靜かに。親分は火の玉の様にまつかになつて怒つてゐる。

Mi kuŝis sur io malmola, kaj mia korpo pro tio *fariĝis* blua kaj bruna. (FI 17/-4) わたし何か堅いものの上に臥りましたのでからだは紫色のあざになりましたわ。〔註〕『紫色になる』は Pro la malvarmo ŝiaj nudaj piedoj *fariĝis* bluaj kaj ruĝaj などとも云ふ。

Granda multo da vortoj *fariĝas* tute senbezona por lernado. (OV 302/-3) 莫大な單語は學習の必要がなくなるのである。

Ĉu ni devas timi, ke tiamaniere nia tuta laborado *fariĝis* vana? (OV 395/25) そんな風にして吾々の事業は全く無駄になることを心配せねばならぬであらうか。

La sonoj *fariĝis* ĉiam pli proksimaj. (FI 110/25) 音はだんだんと近くなつて來た。

Kun ĉiu tago lia mieno *fariĝadis* pli malserena. (FI 112/-4) 日一日と彼の面はくもつて來た。

La nokto *fariĝis* tute malluma (FI 105/10) 夜は全く暗くなつて來た。

Ili *fariĝis* malsataj kaj soifaj. (FII 62/-5) 彼等は腹がへりのどがかわいて來た。

La stato nun *fariĝis* pli danĝera. (IT 79/4) 狀況は今や益々切迫。

Mirinda *fariĝis* nun ĉio en la mondo. (Rz 51/-9) 世の中の事は近頃の事は妙な事になつて來た。

Kio al vi estas? vi ja *fariĝis* pala kiel muro. (Rt 22/6) どうしたのだ。まるで白壁の様にまつ蒼になつたぢやないか。〔註〕pala kiel kadavro (Rt 22/22), kadavre pala (FIII 61/28) 『死人の様にまつ蒼』などとも云ふ。

Post la falo oni *fariĝas* singar'a. (P. 992) 人はころんでから用心深くなる(失策して用心深くなる)。

Grandega multo da vortoj *fariĝus* en la skribado tute nediferencigeblaj unu de alia (OV 293/13). 多くの語は書いて見るとお互にとても區別出來難くなる。

Ĉiu loko, sur kiu ekpaŝos via piedo, *fariĝos* via. (Re 11-24) 汝の足の歩む所汝のものとならん。

Rimarko. „Fariĝi“ do ofte prenas lokon de „esti“ en miksita tempo:

Sed la malgranda Tuk ne kuŝis, li subite *fariĝis* sidanta (=ekestis sidanta, eksidis) sur ĉevalo. Li rajdis galope, galope. (FII 131/28) 小トクは臥つては居らず、急に馬に跨つた。ポカポカと騎つて行つた。

Se tamen iu anstataŭigos bruton per bruto, tiam ĝi kaj ankaŭ ĝia anstataŭigito *fariĝu*



(=estu) konsekrita. (Lv 27-1) 家畜を以て家畜に易へたる時にはその家畜も代りとなれる家畜も清めらるべし。

§ 8 (b) **FARIĜI**, kiel Kompleta Verbo, signifas „esti farita, (ek-)okazi, (ek-)esti“: 『(事が)起る, 成る, ある』。Kelkaj ekzemploj:—

Kio, kio *fariĝis*? (Rz 12/-4)=Kio, kio okazis? (Rz 13/10) どうどうしたと云ふのだ(何事が起つたか)。

Mi decidis en mia koro esplori kaj ekzameni per la saĝo ĉion, kio *fariĝas* (=estiĝas, okazas) sub la ĉielo. (Ps 5/-5, ank. vd. (5/-2) 余は天の下に起る森羅萬象をば智を以て調査探究せんと思ひ定めた。

Kaj Dio diris: estu lumo; kaj *fariĝis* (=ekestis) lumo. (Gn 1/7) 神は『光あれ』と宣つた。すると光が生じた。

Fruktu kaj multiĝu; popolo kaj popolaro *fariĝos* (=formiĝos) el vi, kaj reĝoj eliros el via lumbo. (Gn 80/-3) 稔れよふえよ、國民民族か汝等より生じ、汝の腹より王者が生まれるであらう。

Ŝi preĝis al Dio; „Ne mia, sed via volo *fariĝu* (=efektivigu), ĝi sola estas la plej bona!“ (FIII 5/-4). 彼女は神様に祈つた『成るは私の意志ならで、神の御意であれ(私の思ふままではなく、神の御思召通りになれ)、最善なるは神の御意のみなり』。

Patro, kio *fariĝis* al vi? (Rt 7/4) 父上如何なされましたか。

〔註〕 *fariĝi al*— は『(誰)の身に(起る)』即ち『對して』意の *al*.

Mi jam ne povas diri al vi, kio kun li *fariĝis*. (Rz 10/2) 彼が(彼の身が、運命が)どうなつたか已は知らぬ。

〔註〕 *fariĝi kun*— は『(誰)の身柄を(どうする)』、即ち『處分』の *kun*. 例:

For *kun* li! 奴を追ひ出せ(連れ去れ)。

Kiel ni faru *kun* li? 奴を如何致し(處分し)ませうか。

Estis same *kun* mi, kiel estis *kun* li. 私の場合も彼の場合と同然であつた。

Ho Dio, kio *fariĝis* (=estiĝis) en mi! Tiele mi ja neniam antaŭe pensis, nek sentis! (FI 87/20) はてな、已はどうかしたぞ(何事が身内に起つたか)、こんな風な考へ方をしたり、こんな氣持になることは以前にはない事だつたもの。

Tiam la dek unu fratoj postulis, ke oni konduku ilin al la reĝo. Sed oni respondis al ili, ke tio ne povas *fariĝi* (=esti farata) ĉar estas ja nokto. (FI 113/-2) 十一人の兄弟は王様の處へ連れて行つてくれと要求した。然し何しろ夜だからそんなことは出来ぬと云ふ返事。

Unu vesperon *fariĝis* (=ekokazis) granda uragano. (FI 17/12). ある晩大嵐になつた(大嵐が起つた)。

Nun komencis plui; falis gutoj post gutoj, kaj baladaŭ *fariĝis* vera pluvo. (FI 99/31) すると雨が降つて來た、ポツリポツリと落ちて來たが、やがて本ぶり(の大雨)になつて來た。

La hieraŭa tago estas jam por infano malproksima estinteco; kio estis, okazis aŭ *fariĝis* antaŭ kelke da tagoj, malaperas kaj disfluas antaŭ iliaj okuloj en la nebulo de forgeso. (M 41/-6) 昨日は子供にとつてはもう遠い過去である。數日前にあつた事、起つた事、出來た(成つた)事は子供の眼の前には忘却のもやのうちに消え流れて了ふのである。



# “Ekzercaro” 中の句讀點の用法

(Interpunkcio en “Ekzercaro”)

( 1 )

Joŝicugu OKAMOTO

句讀點の用法については 1893 年にザメンホフはその大綱は各國語と同様ではあるが細い點ではまだ規則が十分きめられない旨をのべてゐる。而してその用法は今日に於ても細則に於ては一定してゐないが大體のところは一定してきた様である。

今日普通用ひられてゐる句讀點の用法について筆者は「新撰和エス辭典」763-766 頁に於てその大綱を紹介しておいた。又 Fruictier の Komplete Gramatiko (Grenkamp 増訂版) や Kaloscay と Waringhien の共著の Plena Gramatiko 等にも出てゐるが大綱は大體一致してゐるが細い點では一致してゐない。

今こゝではザメンホフの模範文例集たる Ekzercaro の中で用ひられてゐる句讀點の用ひ方をしらべてみようと思ふ。Ekzercaro はザメンホフが苦心して編纂したものだがその句讀點の用ひ方についても相當意を用ひてゐるものと思ふ。

併しこれらを見てもザメンホフは大綱に於てハッキリした法則を暗示してゐるが細い點については自由であつて一定の法則を暗示してゐるやうに考へられない。

今 Ekzercaro の全用例をしらべその暗示する法則を各種句讀點についてのべてみたいと思ふ。

注意:—

1. こゝに用ひた Ekzercaro は L. L. Zamenhof: “Fundamento de Esperanto Gramatiko, Ekzercaro, Universala Vortaro” の kvina eldono (1918) 版 (頁が Gramatiko と Ekzercaro と U. V. と別々になつてゐるもの) の第二部の Ekzercaro de la lingvo internacia “Esperanto” の本文だけについてしらべたものである (本文の次にある五ヶ國語對譯の語彙については調査をしない)。

2. 記號 (signoj) 及之についての法則は新撰和エス辭典の記載と同一の順序にし比較に便にした。

3. La feino の話を除く他のすべて Ekzercaro の中の全用例は “Fundamenta Krestomatio de la lingvo Esperanto” 中に入つてゐるがこの中の句讀點と 1 に記載のものとは比較しなかつた。但し特に必要の場合だけ之に比較した。この際用ひた F. K. は Dekunua eldono (127) 版である。

4. 各項とも全用例を網羅したつもりであるが尙多少の脱漏があるかもしれない。お氣付の點は御指示願ひたい。

## A. Punkto

(1) 終止符として文の終につける。但し終が ! 又は ? で終る時はつけない。

この例は Ekzercaro に無數にあり一々こゝにあげる必要もない。

Ekzercaro 中 (.) 又は (!) 又は (?) で終らぬものは一つもない。

但し §38 に



Grandega hundo metis sur min sian antaŭan piedegon, kaj mi de teruro ne sciis,  
kion fari,

又 § 40 に

Kiam vi ekparolis, ni atendis aŭdi ion novan, sed baldaŭ ni vidis, ke ni trompiĝis,  
といふのがある。兩文中の fari 及 trompiĝis の次は komo (,) になつてゐるが之は明かに  
punkto (.) の誤植と考へてよい。(勿論 F. Krestomatio では . になつてゐる。) 尙文とか句と  
いふのでなく表題等についてはどうかと云ふに之は様々である。

全體の表題 EKZERCARO de la lingvo internacia «Esperanto» には (.) がない。

§ 1. § 2. ... § 42. はすべて終に (.) がついてゐる。

§ 1 の見出しの ALFABETO には (.) がついてゐない。

§ 2—§ 4 の見出しの Ekzerco de legado. には終に (.) がついてゐる。

§ 11 の見出し La feino. は終に (.) があり §§ 13, 15, 17, 19 の La feino (Daŭrigo). に  
も終に (.) がある。

§ 21 の La feino (Daŭrigo) には (.) がなく又 § 23 の La feino (Fino) にも (.) がない。

(2) 語の省略のしるしとして用ふ。Ekzercaro には次の如き用例がある。

t. e. (§§ 14, 27, 28, 29)

La doktoredzino A. vizitis hodiaŭ la gedoktorojn P.\* (§ 36)

Gesinjoroj N. (§ 36).

Sinjoro N. (§ 42)

Sinjoro P. (§ 42)

Sinjoro D.\* (§ 42)

k. t. p. (§§ 30, 42\*)

尤も上例中 \* 印を附したものは文の最後にあるため (.) は文の終止符としての (.) か略  
字のしるしとしての (.) かは不明といふことかできるが他の例より推して兩者をかねたもの  
と見て差支へないと思ふ。

## B. Ekkria signo (!)

(1) 感嘆、觀喜、恐怖、其他一切の感動を示す文(又は句)の終に punkto の代りに心の中  
の感動を示す符號として用ふ。

! を用ひた用例を示せば

Kia ĝoja festo! (§ 10)

Kion mi vidas! (§ 17)

Ho, ĉielo! (§ 21)

... por doni trinki al tiu ĉi sinjorino! (§ 19)

Ho, Dio! kion vi faras! (§ 26)

Ha, kiel bele! (§ 26)

Fi, kiel abomene! (§ 26)

Ŝajnas al mi, ke el ŝia buŝo elsaltas perloj kaj diamantoj! (§ 17)

Kia granda brulo! (§ 31)

... mi pagos al ŝi por tio ĉi! (§ 21)

(2) 命令、叱責、挨拶等を示す文(又は句)の終に punkto の代りに用ひ意を強める。

... ke mi iru al la fonto! (§ 19)

... kaj iru tuj! (§ 19)

Iru for! (§ 20)

Infano, ne tuŝu la spegulon! (§ 20)

Karaj infanoj, estu ĉiam honestaj! (§ 20)



For de tie ĉi! (§ 26)

Nu, iru pli rapide! (§ 26)

Flanken, sinjoro! (§ 28)

Sidigu vin (aŭ sidiĝu), sinjoro! (§ 39)

Kia demando! (§ 41)

Mi diris al la reĝo: via reĝa moŝto, pardonu min! (§ 42)

Mi deziras al vi bonan tagon, sinjoro! (§ 10)

Bonan matenon! (§ 10)

Ĝojan feston! (§ 10)

以上 ! を用いた用例のすべてである。

## C. Demandosigno (?)

(1) 直接疑問の文(又は語句)の終りにおく

例: Kie estas la libro kaj la kraĵono? (§ 6)

かういつた例は 22 例あるが一々こゝへは出さない。又一つも例外がないから出す必要もない。

(2) 形は肯定文でも疑問の意味を含める場合にはやはり文尾に ? をつけて疑問の意を示す。Ekzercaro には次の一例があるのみ。

“Nu, mia filino?”

## Ĉ. Komo (,)

(1) 呼掛の語句、間投詞、間投詞的に用ひられた副詞等を本文と區別するために用ふ。この用例を全部次にあげることにしよう。(次の用例中便宜のため呼掛の語句、間投詞、間投詞的に用ひられた副詞等は斜體字で示すことにした)。

Ludoviko, donu al mi panon (§ 8)

Mi deziras al vi bonan tagon, *sinjoro*! (§ 10)*Ne*, vi eraras, *sinjoro*:... (§ 10)“Tre volonte, *mia bona*”, diris la bela knabino. (§ 15)*Knabo*, vi estas neĝentila. (§ 16)*Sinjoro*, vi estas neĝentila. (§ 16)*Sinjoroj*, vi estas neĝentilaj: (§ 16)*Mia hundo*, vi estas tre fidela. (§ 16)“Pardonu al mi, *patrino*,” diris la malfeliĉa knabino... (§ 17)De kio tio ĉi venas, *mia filino*? (§ 17)*Marinjo*, rigardu, kio... (§ 17)*Certe*, mi alportis arentan vazon... (§ 19) [argentan は明かに argentan の誤植]*Bone*, ĉar vi estas tiel servema, mi... (§ 19)*Infano*, ne tuŝu la spegulon! (§ 20)*Karaj infanoj*, estu ĉiam honestaj! (§ 20)*Nu*, *mia filino*? (§ 21)“*Jes, patrino*”, respondis... (§ 21)*Ho*, ĉielo! (§ 21)*Ho ve*, *sinjoro*, mia *patrino* forpelis min el la domo. (§ 21)*Ho*, *Dio*! kion vi faras! (§ 26)*Ha*, kiel bela! (§ 26)*Fi*, kiel abomene! (§ 26)*Nu*, iru pli rapide! (§ 26)



Flanken, *sinjoro!* (§ 28)

*Ekzemple*, ni povas diri... (§ 29) [注意: *Ekzemple* はこの例意外はすべてその後に (:) を伴ひ (,) を伴つた例は本例のみ]。

...ni atendas vin, *Savonto de la mondo.* (§ 32)

Vi parolas sensencaĵon, *mia amiko.* (§ 35)

Sidigu vin (aŭ sidiĝu), *sinjoro!* (§ 39)

Mi diris al la reĝo: *via reĝa moŝto*, pardonu min! (§ 42)

(2) 同格の語 (apozicio) を明示するためその前後に (,) をおく (同格の語を斜體字で示した)。

...forkondukis ŝin al la palaco de sia patro, *la reĝo*, kie li edziĝis je ŝi.

El la tri leteroj unu estis adresita: al Lia Episkopa Moŝto, *Sinjoro N.*; la dua: al Lia Grafa Moŝto, *Sinjoro P.*; la tria: al Lia Moŝto, *Sinjoro D.*

(3) 對立する語句 (又は文) を kaj, aŭ 其他の接續詞をおかずして連ねる時其等の語句又は文を區分するために (,) をおく。

Aa, Bb, Cc, ... (§ 1)

Nomoj de la literoj: a, bo, co, ĉo, do, e, fo, ... (§ 1)

Januaro estas la unua monato de la jaro, Aprilo estas la kvara, Novembro estas la dek-unua, Decembro estas la dekdua. (§ 12)

Vi estas tiel bela, tiel bona kaj tiel honesta, ... (§ 15)

Kaj kiam ŝi parolis tiujn ĉi vortojn, elsaltis el ŝia buŝo tri rozoj, tri perloj kaj tri grandaj diamantoj. (§ 17)

Mi amas min mem, vi amas vin mem, li amas sin mem, kaj ĉiu... (§ 18)

Nun mi legas, vi legas kaj li legas; ... (§ 20)

Ni estu gajaj, ni uzu bone la vivon, ĉar ... (§ 20)

Venu, ni atendas vin, Savonto... (§ 22)

Estu trankvila, mia tuta ŝuldo estos pagita al vi baldaŭ. (§ 25)

...sekve: tie (=en tiu loko), tien (=al tiu loko); ..., la birdo flugis en la ĝardenon, sur la tablon“, kaj ..., „ĝardenon“, „tablon“ staras... flugis al la ĝardeno, al la tablo... (§ 28)

Ia, ial, iam, ie, ie!, ies, io, iom, iu. (§ 30)

...ni ricevas vortojn demandajn aŭ rilatajn: kia, kial, kiam, kie, kiel, kies, kio, kiom, kiu. (§ 30)

...ni ricevas...: tia, tial, tiam, tie, tiel, ties, tio, tiom, tiu. (§ 30)

...ni ricevas...: ĉia, ĉial, ĉiam, ĉie, ĉiel, ĉies, ĉis, ĉiom, ĉiu. (§ 30)

...ni ricevas...: nenia, nenial, neniam, nenie, neniel, nenies, nenio, neniom, neniŭ. (§ 30)

...ekzemple: tiu (pli malproksima), tiu ĉi (aŭ ĉi tiu) (pli proksima): tie (malproksime), tie ĉi aŭ ĉi tie (proksime). (§ 30)

...ni ricevas...: kia ajn, kial ajn, kiam ajn, kie ajn, kiel ajn, kies ajn, kio ajn, kiom ajn, kiu ajn. (§ 30)



... ekzemple: tiama, ĉiama, kioma, tiea, ĉi-tiea, tieulo, tiamu'o k.t.p. (§ 30)

La korpo estas morta, la animo estas senmorta. (§ 31)

Li estas morte malsana, li ne vivos pli, ol unu tagon. (§ 31)

... ĝi nur deflugis de la arbo, alflugis al la domo kaj surflugis sur la tegmenton. (§ 31)

Per hakilo ni hakas, per segilo ni segas, per fosilo ni fosas, per kudrilo ni kudras, per tondilo ni tonnas, per sonorilo ni sonoras, per fajfilo ni fajfas. (§ 34)

Mia skribilaro konsistas el inkujo, sablujo, kelke da plumoj, krajono kaj inksorbilo. (§ 34)

... el telero, kulero, tranĉilo, forko, glaseto por brando, glaso por vino kaj telertuketo. (§ 34)

En tiuj ĉi boteletoj sin trovas diversaj acidoj: vinagro, sulfuracido, azotacido kaj aliaj. (§ 35)

Ĉemizojn, kolumojn, manumojn kaj ceterajn similajn objektojn ni nomas tolaĵo ... (§ 35)

Petro, Anno kaj Elizabeto estas miaj gefratoj. (§ 36)

La patro de mia edzino estas mia bopatro, mi estas lia bofilo, kaj mia patro ... (§ 36)

... sekve ŝia frato estas mia bofrato, ŝia fratino estas mia bofratino ... (§ 36)

Li ne estas lavisto, li estas lavistinedzo. (§ 36)

La filoj, nepoj kaj pranepoj de reĝo estas reĝidoj. (§ 36)

Ĉevalido estas nematura ĉevalo, kokido—nematura koko, bovido—nematura bovo, birdido—nematura birdo. (§ 36)

Le loĝantoj de unu regno estas samregnanoj, la loĝantoj de unu urbo estas samurbanoj, la konfesantoj de unu religio estas samreligianoj. (§ 37)

... la lignaĵisto faras tablojn, seĝojn kaj aliajn objektojn. (§ 37)

Ni havas diversajn servantojn: kuiriston, ĉambristinon, infanistinon kaj veturigiston. (§ 37)

Tuj post la hejto la forno estis varmega, post unu horo ĝi estis jam nur varma, post du horoj ĝi estis nur iom varmeta, kaj post tri horoj ... (§ 38)

Johanon, Nikolaon, Erneston, Vilhelmon, Marion, Klaron kaj Sofion iliaj gepatroj nomas Johanĉjo (aŭ Joĉjo), Nikolĉjo (aŭ Nikoĉjo aŭ Nikĉjo aŭ Niĉjo), Erneĉjo (aŭ Erĉjo), Vilhelĉjo (aŭ Vilheĉjo aŭ Viĉjo), Manjo (aŭ Marinjo), Klanjo kaj Sonjo (aŭ Sofinjo) (§ 38)

... tamen li estas tre pardonema, li ne portas longe la koleron kaj ĝi tute ne ... (§ 41)

Centimo, pfenigo kaj kopeko estas moneroj. (§ 41)

Ekzemple: plenumi, kolumo, manumo. (§ 42)

Sano, sena, sane, sani, sanu, saniga, ... malsanulista k.t.p. (§ 42)



上例に見る様に澤山の對立した語句(又は文)が連續して澤山並べられる時はその間に接續詞をおかないで唯最終の語句(又は文)の前へのみ接續詞をおく(これさへおかぬ場合がある)。尙これらの語句は對立することが多いが必しも對立してゐなくともよいことも又上の例によつて明かである。

尙接續詞はおいてないが幾分接續詞的の意味をもつた副詞が間におかれる時その副詞の前へ(,)をおくことは次の例に見るも明かである。

Hodiaŭ estas bela frosta vetero, tial mi prenos miajn glitilojn... (§ 34)

Sur tiuj ĉi vastaj kaj herboriĉaj kampoj paŝtas sin grandaj brutaroj, precipe aroj da bellanaj ŝafoj. (§ 34)

Ĉiuj parencoj de mia edzino estas miaj boparencoj, sekve ŝia frato estas mia bofrato, ... (§ 36)

(4) 接續詞又は關係詞にて他の文に結合せられた文を明示するため兩文の連接部へ(,)をおく。

但しこの場合兩文の主語又は述語が共通なるため第二の文に於てそれが省略せられてゐる場合は(,)をおかない。又語句を接續詞で結合する場合(,)はをおかない。

而して Ekzercaro 中には多少この通則にあてはまらない例外がある。それは(,)といふものは文や句を區切るにしても相當軽い氣持のものであるから文の意味が通ずる場合は必しもおかぬともよいから Ekzercaro 中の用例でもまちまちになつてゐるのだと考へられる。

こゝでは各々の接續詞について用例をしらべてみよう。

#### (a) kaj

(1) 完全な二文を接續する場合,をおく。(kaj を明示するため斜字體にした)。

La libro estas sur la tablo, kaj la krajono kuŝas sur la fenestro. (§ 6)

Aleksandro ne volas lerni, kaj tial mi batas Aleksandron. (§ 9)

De la patro mi ricevis libron, kaj de la frato mi ricevis plumon. (§ 9)

Mi venas de la avo, kaj mi iras nun al la onklo. (§ 9)

En la tago ni vidas la helan sunon, kaj en la nokto ni vidas la palan lunon... (§ 10)

Seskek minutoj faras unu horon, kaj unu minuto konsistas el sesdek sekundoj. (§ 12)

...tiu ĉi patrino varmege amis sian pli maljunan filinon, kaj en tiu sama tempo ŝi havis teruran malamon kontraŭ la pli juna. (§ 13)

Por miaj kvar infanoj mi aĉetis dek du pomojn, kaj al ĉiu el la infanoj mi donis po tri pomoj. (§ 14)

Li estas knabo, kaj ŝi estas knabino. (§ 16)

Mi vokas la knabon, kaj li venas. (§ 16)

Mi vokas la knabinon, kaj ŝi venas. (§ 16)

La malfeliĉa infano rakontis al ŝi naive ĉion, kio okazis al ŝi, kaj, dum ŝi parolis, elfalis el ŝia buŝo... (§ 17)

Mi amas min mem, vi amas vin mem, li amas sin mem, kaj ĉiu homo amas sin mem.



Mi lavis min en mia ĉambro, *kaj* ŝi lavis sin en sia ĉambro. (§ 18)

“Mi volas ke vi tien iru,” diris la patrino, “*kaj* iru tuj!” (この場合言葉の文は Mi volas ke vi tien iru, *kaj* iru tuj! と続くものと見る)。

Vi skribas, *kaj* la infanoj skribas; ... (§ 20)

Hieraŭ mi renkontis vian filon, *kaj* li ĝentile salutis min. (§ 20)

Hodiaŭ estas sabato, *kaj* morgaŭ estos dimanĉo. (§ 20)

Hieraŭ estis vendredo, *kaj* postmorgaŭ estos lundo. (§ 20)

Li venu, *kaj* mi pardonos al li. (§ 20)

La filo de la reĝo, kiu revenis de ĉaso, ŝin renkontis; *kaj*, vidante, ke ŝi estas tiel bela, li demandis ŝin, kion ŝi faras ... (§ 21)

El sub la kanapo la muso kuris sub la liton, *kaj* nun ĝi kuras sub la lito. (§ 26)

Mi staras ekster la domo, *kaj* li estas interne. (§ 26)

... “la birdo flugis en la ĝardenon, sur la tablon,” *kaj* la vortoj “ĝardenon,” “tablon” staras tie ĉi en akuzativo ... (§ 28)

... mi iris dekstren, *kaj* li iris maldekstren. (§ 28)

Li parolas, *kaj* lia parolo fluas dolĉe ... (§ 31)

Li tuj faris, kion mi volis, *kaj* mi dankas lin por la tuja plenumo de mia deziro. (§ 31)

Kiu okupas sin je meĥaniko, estas meĥanikisto, *kaj* kiu okupas sin je ĥemio, estas ĥemiisto. (§ 32)

La fotografisto fotografis min, *kaj* mi sendis mian fortografajon al mia patro. (§ 32)

En somero ni veturas per diversaj veturiloj, *kaj* en vintro ni veturas per glitveturilo. (§ 34)

La patro de mia edzino estas mia bopatro, mi estas lia bofilo, *kaj* mia patro estas la bopatro de mia edzino. (§ 36)

La lignisto vendas lignon, *kaj* la lignaĵisto faras tablojn, ... (§ 37)

Verkisto verkas librojn, *kaj* skribisto simple transskribas paperojn. (§ 37)

... post du horoj ĝi estis nur iom varmeta, *kaj* post tri horoj ĝi estis jam tute malvarma. (§ 38)

Kun bruo oni malfermis la pordegon, *kaj* la kaleŝo enveturis en la korton. (§ 38)

Grandega hundo metis sur min sian antaŭan piedegon, *kaj* mi de teruro ne sciis, kion fari, (注意 fari の次は , になつてゐるが明かに . の誤植である事は上にのべた)。

... la edziĝa soleno estos en la nova preĝejo, *kaj* la edziĝa festo estos en la domo de liaj estontaj bogepatroj. (§ 39)

... sed la vento forblovis de mia kapo la ĉapon, *kaj* ĝi, flugante, pendiĝis sur la branĉoj de la arbeto. (§ 39)

La domo, en kiu oni lernas, estas lernejo, *kaj* la domo, en kiu oni preĝas, estas preĝejo. (§ 40)

Skatolo, en kiu oni tenas plumojn, estas plumujo, *kaj* bastoneto, sur kiu oni tenas



plumon por skribado, estas plumingo. (§ 40)

En la poŝo de mia pantalono mi portas monujon, *kaj* en la poŝo... (§ 40)

Li estas tre purema, *kaj* eĉ unu polveron vi ne trovos sur lia vesto. (§ 41)

Ni ĉiuj kunvenis, por priparoli tre gravan aferon; sed ni ne povis atingi ian rezultaton, *kaj* ni disiris. (§ 42)

Malfeliĉo ofte kunigas la homojn, *kaj* feliĉo ofte disigas ilin. (§ 42)

La sufikso «um» ne havas difinitan signifon, *kaj* tial la (tre malmultajn) vortojn kun «um» oni devas lerni, kiel simplajn vortojn. (§ 42)

即ちこの用例は上記 45 例である。

(ロ) 完全な二文を接續しながら, をおかぬ例外的の用例は

Rozo estas floro *kaj* kolombo estas birdo. (§ 5)

El ŝiaj multaj infanoj unuj estas bonaj *kaj* aliaj estas malbonaj. (§ 12)

Nun mi legas, vi legas *kaj* li legas; ni ĉiuj legas. (§ 20)

Antaŭ tri tagoj mi vizitis vian kuzon *kaj* mia vizito faris al li plezuron. (§ 20)

... kion ŝi faras tie ĉi tute sola *kaj* pro kio ŝi ploras. (§ 21)

... tiam Nikodemo estas la batanto *kaj* Jozefo estas la batato. (§ 22)

Se ni bezonas uzi prepozicion *kaj* la senco ne montras al ni, kian prepozicion uzi... (§ 29)

La tranĉilo estis tiel malakra, ke mi ne povis tranĉi per ĝi la viandon *kaj* mi devis ugi mian poŝan tranĉilon. (§ 34)

Li paliĝis de timo *kaj* poste li ruĝiĝis de honto.

La rusoj loĝas en Rusujo *kaj* la germanoj en Germanujo. (§ 40)

Via parolo estas tute nekomprenebla *kaj* viaj leteroj estas ĉiam skribitaj tute nelegeble. (§ 41)

... tamen li estas tre pardonema, li ne portas longe la koleron *kaj* li tute ne estas venĝema. (§ 41)

以上例外は 12 例である。即ち上記累計 57 例中 12 例の例外がある。つまり 21% 強にあたる例外である。

(ハ) 兩文の主語又は述語が共通なためその一が省略されてゐる場合又は單に語句を接續する場合には, を用ひない。

Patro *kaj* frato. (§ 5)

Kie estas la libro *kaj* la krajono? (§ 6)

Sur la fenestro kuŝas krajono *kaj* plumo. (§ 6)

Mi manĝas per la buŝo *kaj* flaras per la nazo. (§ 8)

Ni vidas per la okuloj *kaj* aŭdas per la oreloj. (§ 9)

... ni vidas la palan lunon *kaj* la belajn stelojn. (§ 10)

La pli maljuna estis tial simila al la patrino per sia karaktero *kaj* vizaĝo, ke... ; ili ambaŭ estis tiel malagrablaĵ *kaj* tiel fieraj, ke... (§ 11)

La pli juna filino, kiu estis la plena portreto de sia patro laŭ sia boneco *kaj* honesteco, ... (§ 11)



Kvin *kaj* sep faras dek du. (§ 12) Dek *kaj* dek faras dudek. (§ 12)

Kvar *kaj* dek ok faras dudek du. (§ 12)

Tridek *kaj* kvardek kvin faras sepdek kvin. (§ 12)

Ŝi devigis ŝin manĝi en la kuirejo *kaj* laboradi senĉese. (§ 13)

...iri ĉerpi akvon... *kaj* alporti domen plenan grandan kruĉon. (§ 13)

Mi aĉetis dekduon da kuleroj *kaj* du dekduojn da forkoj. (§ 14)

...tial du metroj kostas kvar *kaj* duonon frakojn (aŭ da frankoj). (§ 14)

Kaj ŝi tuj lavis sian kruĉon *kaj* ĉerpis akvon... *kaj* alportis al la virino... (§ 15)

Vi estas tiel bela, tiel bona *kaj* tiel honesta, ke mi devas fari al vi donacon. (§ 15)

...elsaltis el ŝia buŝo tri rozoj, tri perloj *kaj* tri grandaj diamantoj. (§ 17)

Ŝajnas al mi, ke el ŝia buŝo elsaltas perloj *kaj* diamantoj! (§ 17)

Sinjoro Petro *kaj* lia edzino tre amis miajn infanojn;... (§ 18)

...sed ŝi mem tute ne zorgas pri si *kaj* tute sin ne gardas. (§ 18)

...post la vespermanĝo niaj fratoj eliris kun la gastoj el sia domo *kaj* akompanis ilin ĝis ilia domo. (§ 18)

...kiu eliris el la arbaro *kaj* petis de ŝi trinki (tio ĉi estis tiu sama feino, kiu prenis sur sin la formon *kaj* la vestojn de princino, por...) (§ 19)

“Ĉu mi venis tien ĉi,” diris al ŝi la malĝentila *kaj* fiera knabino,... (§ 19)

...ili ĉiuj sidas silente *kaj* skribas. (§ 20)

«Jes, patrino,» respondis al ŝi la malĝentilulino, elĵetante unu serpenton *kaj* unu ranon. (§ 21)

La malfeliĉa infano forkuris *kaj* kaŝis sin en la plej proksima arbaro. (§ 21)

...el ŝia buŝo eliris kelke da perloj *kaj* kelke da diamantoj,... (§ 23)

...la malfeliĉa knabino, multe kurinte *kaj* trovinte nenium, kiu volus ŝin akcepti, baldaŭ mortis... (§ 23)

... (=ĝi estas en la ĉambro *kaj* flugas en ĝi). (§ 26)

... (=ĝi estas ekster la ĉambro *kaj* flugas nun en ĝin). (§ 26)

Mi sidas sur seĝo *kaj* tenas la piedojn sur benketo. (§ 26)

En la salono estis neniu krom li *kaj* lia fianĉino. (§ 26)

...ne ĉar la prepozicioj “en” *kaj* “sur” tion ĉi postulas, sed nur... (§ 28)

...ke la birdo sin ne trovis antaŭe en la ĝardeno aŭ sur la tablo *kaj* tie flugis,... (§ 28)

... (ni volas montri, ke la ĝardeno *kaj* tablo ne estis la loko de la flugado...); ... (§ 28)

Ni disiĝis *kaj* iris en diversajn flankojn:... (§ 28)

Mi veturis du tagojn *kaj* unu nokton. (§ 29)

Ekzemple, ni povas diri “obei al la patro” *kaj* “obei la patron” (anstataŭ “obei je le patro”). (§ 29)

...ni povas diri “pardonu al la amiko” *kaj* “pardonu la malamikon”, sed ni devas diri... (§ 29)

...ĉar el ili ĉiu povas jam fari al si grandaŭ serion da aliaj pronomoj *kaj* adverboj. (§ 30)



Ekster tio...per helpo de gramatikaj finiĝoj *kaj* aliaj vortoj (sufiksoj); ...tieulo, tiamulo k.t.p. (= *kaj* tiel plu). (§ 30)

Li koleras *kaj* insultas. (§ 31)

Lia filo mortis *kaj* estas malviva. (§ 31)

...lia parolo fluas dolĉe *kaj* agrable. (§ 31)

Li eliris el la dormoĉambro *kaj* eniris en la manĝoĉambron. (§ 31)

La birdo ne forflugis: ĝi nur deflugis de la arbo, alflugis al la domo *kaj* surflugis sur la tegmenton. (§ 31)

Li portas rozokoloran superveston *kaj* teleroforman ĉapelon.

Teatramanto ofte vizitas la teatron *kaj* ricevas baldaŭ teatrajn manierojn. (§ 32)

La tablo staras malrekte *kaj* kredeble baldaŭ renversiĝos. (§ 33)

Li staras supre sur la monto *kaj* rigardas malsupren sur la kampon. (§ 33)

La edzino de mia patro estas mia patrino *kaj* la avino de miaj infanoj. (§ 33)

Mi vidis vian avinon kun ŝiaj kvar nepinoj *kaj* kun mia nevino. (§ 33)

Mi havas bovon *kaj* bovinon. (§ 33)

... tial mi prenos miajn glitilojn *kaj* iros gliti. (§ 34)

Mia skribilaro konsistas el inkujo, sablujo, kelke da plumoj, krajono *kaj* inksorbilo. (§ 34)

...kiu konsistas el telero, kulero, tranĉilo, forko, glaseto por brando, glaso por vino *kaj* telertuketo. (§ 34)

Nia lando venkos, ĉar nia militistaro estas granda *kaj* brava. (§ 34)

Sur tiuj ĉi vastaj *kaj* herboriĉaj kampoj paŝtas sin grandaj brutaroj, precipe aroj da bellanaj ŝafoj. (§ 34)

Mi trinkis teon kun kuko *kaj* konfitaĵo. (§ 35)

...vinagro, sulfuracido, azotacido *kaj* aliaj. (§ 35)

Ĉemizojn, kolumojn, manumojn *kaj* ceterajn similajn objektojn ni nomas tolaĵo... (§ 35)

Li amas tiun ĉi knabinon pro sia beleco *kaj* boneco. (§ 35)

La tuta supraĵo de la lago estis kovrita per naĝantaj folioj *kaj* diversaj aliaj kreskaĵoj. (§ 35)

Patro *kaj* patrino kune estas nomataj gepatroj. (§ 36)

Petro, Anno *kaj* Elizabeto estas miaj gefratoj. (§ 36)

...miaj frato *kaj* fratino (gefratoj) estas la bogefratoj de mia edzino. (§ 36)

La edzino de mia nevo *kaj* la nevino de mia edzino estas miaj bonevinoj. (§ 36)

La filoj, nepoj *kaj* pranepoj de reĝo estas reĝidoj. (§ 36)

La regnestro de nia lando estas bona *kaj* saĝa reĝo. (§ 37)

Luteranoj *kaj* Kalvinanoj estas kristanoj. (§ 37)

Germanoj *kaj* francoj, kiuj loĝas en Rusujo, estas Rusujanoj, kvankam ili ne estas rusoj. (§ 37)

Li estas nelerta *kaj* naŭva provincano. (§ 37)



La botisto faras botojn *kaj* ŝuojn. (§ 37)

... la lignaŝisto faras tablojn, seĝojn *kaj* aliajn objektojn. (§ 37)

Ni havas diversajn servantojn: kuiriston, ĉambristaron, infanistaron *kaj* veturigiston. (§ 37)

Li estas mensogisto *kaj* malnoblulo. (§ 37)

Mi aĉetis por la infanoj tableton *kaj* kelke da seĝetoj. (§ 38)

Li sidas apud la tablo *kaj* dormetas. (§ 38)

Johanon, Nikolaon, Erneston, Vilhelmon, Marion, Klaron *kaj* Sofion iliaj gepatroj nomas Johanĉjo... Manjo (aŭ Marinjo), Klanjo *kaj* Sonjo (aŭ Sofinjo). (§ 38)

... tial mi prenis broson *kaj* purigis la veston. (§ 39)

Tiu ĉi maljunulo tute malsaĝiĝis *kaj* infaniĝis. (§ 39)

En la printempo la glacio *kaj* la neĝo fluidiĝas. (§ 39)

... sed li tamen ne mortigis sin mem *kaj* ankaŭ estis mortigita de neniu; unu tagon, promenante apud la reloĵoj de fervojo, li falis sub la radojn de veturanta vagonaro *kaj* mortiĝis. (§ 39)

La junulo aliĝis al mia militistaro *kaj* kuraĝe batalis kune kun ni kontraŭ niaj malamikoj. (§ 39)

Vitro estas rompebla *kaj* travidebla. (§ 41)

Lia edzino estas tre laborema *kaj* ŝparema, sed ŝi estas ankaŭ tre babilema *kaj* kriema. (§ 41)

Li estas tre ekkolerema *kaj* ekscitiĝas ofte ĉe la plej malgranda bagatelo; ... (§ 40)

Centimo, pfenigo *kaj* kopeko estas moneroj. (§ 41)

Mi disŝiris la leteron *kaj* disŝetis ĝiajn pecetojn en ĉiujn angulojn de la ĉambro. (§ 42)

これに属する用例は全體で上の 98 例である。(§ 42 の最終の k.t.p. の k. を *kaj* に勘定すると 99 例となる。)

これには (イ) に對する (ロ) の如き例外が一つもないことは注目に値ひする。

但し Eksercaro 中には次の 6 個の例の如く *kaj* が文首にあるもの及び *kaj* の前に, よりも強い; がおかれてゐるものがある。これらに於ては *kaj* の前に, をおく必要のないことは自明である。

*Kaj* ŝi tuj lavis sian kruĉon *kaj* ĉerpis... (§ 15)

*Kaj* kiam ŝi parolis tiujn ĉi vortojn, elsaltis el ŝia buŝo tri rozoj, ... (§ 17)

Vi devas nur iri al la fonto ĉerpi akvon; *kaj* kiam malriĉa virino petos de vi trinki, vi donos... (§ 17)

*Kaj* ŝi tuj kuris bati ŝin. (§ 21)

La filo de la reĝo, kiu revenis de ĉaso, ŝin renkontis; *kaj*, vidante, ke ŝi estas tiel bela, li demandis ŝin, kion... (§ 21)

... ke ŝia propra patrino ŝin forpelis de si; *kaj* la malfeliĉa knabino, multe kurinte *kaj* trovinte nenion, ... (§ 23)

以上 *kaj* についてのべた規則が大體他の接續詞 (又は關係詞) についても云はれる様であるが接續詞の種類によつて多少ちがふのでその一々について次に調べてみよう。(以下次號)





Antikvaj literoj en Temija, Otaru.

## ANTIKAJ LITEROJ EN TEMIJA

Keiji Ŭakisaka

*Otaru Budhisma Esp.-Societo*

Jen vi trovos la groton, se vi piediras ĉirkaŭ tricent metrojn, laŭlonge de l' vojo ĉe la krutmalsupro de l' parko Temija, situanta norde de la haveno Otaru: Ĝi estas la groto fame konata en Temija kun misteraj litersignoj.

Ĝi estas nur tri metrojn alta kaj kvar m. larĝa. Se vi nun proksimiĝas al tiu groto pli profunden, jen vi vidas tiajn misterajn litersignojn, gravuritaj sur la ŝtonmuro de la groto, t.e. ĉirkaŭ kvardek, kies formoj estas ja groteskaj, sed ankaŭ tiel interesaj, kiel birdo, aŭ kiel homoj levantaj ambaŭ manojn kaj kriantaj. Kaj, se vi plie rigardon fiksas tiujn misterajn formojn, jen ŝajnus al vi, kvazaŭ ili ekmoviĝus unu post aliaj.

La historio rakontas al ni, la groton oni eltrovis; kaj la ĉirkaŭaĵo de la groto, pli antaŭe, estis marbordo; sed laŭ progreso de la haveno Otaru, la loko ŝanĝiĝis tagon post tago. Kaj unu parto de la groto estas malkaŝita per ŝutpleniga laborado aŭ per konstrua laborado de fervojo. Oni diras ke unu ŝtonĉarpentisto unuafoje eltrovis tiun groton, kiam li dehakis ŝtonmaterialojn en la jaro 1866. Pli poste en 1878, Enomoto-Bujo kaj Jamada-Teiun kopiis tiujn misterajn literojn kaj sendis al Tokio-Universitato, kaj en sama jaro Prof. Miln ankaŭ kopiis la literojn. Kredeble tiuj estas la plej malnovaj kronikoj.

Post tio, oni decidis kaj faris por pliklarigi per cinabroruĝo sur la signoformoj, kaj nuntempe oni ankoraŭ vidas iom da tiuj postsignoj. Sed multaj jaroj forpasis, dume tiuj propraj signoformoj jam perdis duone pro la erozio de vento-pluvo kaj natura disfalo.

Nu, kion la signoj rakontas? Pro kio ili estas gravuritaj? Pri tio, multaj scienculoj esploris kaj studis, kaj ili forte subtenis siajn opiniojn



kontraŭ aliaj: Unuj opiniis ke ĝi estus litero de antikva Kruniko (古代クルニク) aŭ de antikva Ĉinujo (古代支那), aliaj ankaŭ diras, ke ĝi estus tombsigno aŭ dokumento priskribita pri iu afero en la ŝtonepoko, ktp. Sed ĉiujn oni ne povas subteni en firma kredo, ĉar spite de tiuj atestoj ĝi ankoraŭ ne trovas ĝustan konkludon. Mi tamen ĉi tie prezentos al vi du aŭ tri ĉefajn el tiuj opinioj.

En 1887, Dr. Cuboi-Ŝogoro publikigis sian opinion. «Mi opinias, ke la literoj en Temija groto kredeble estus faritaj per homoj en la ŝtonepoko, sed ankaŭ por memorigi iun aferon, kaj ke la apartaj formoj, kiuj similas al homoj sed plejparte senkapaj, estus prezentantaj la statojn de malaj mortintoj kaj la formoj grandaj kaj malgrandaj estus montrantaj diferencojn sur apartaj rangoj, aŭ ke tie estus komuna tombejo por batalmortintoj, ĉar mi tiel aŭdis, ke ĉirkaŭe de la groto oni malkovris multe da homostoj.» Dr. Kida-Teikiĉi diris, ke la signo estas bildo; Dr. Hiramicu opiniis, ke ĝi estas desegno de Ainoj.

Sekve, en 1913, fama arkeologo, Dr. Torii-Rjuzo, post atestado historia konkludis, ke tiuj ĉi literoj estas faritaj ne kiel bildo, nek per homoj en la ŝtonepoko, sed per pli progresintaj homoj. Ĝi estas Tungusa litero el antikva Tu-gjujeŝ-lingvo (古突厥語) kaj la groto estas tombejo, kies literoj estas gravuritaj por memorigo.

Sed, estas bedaŭrinde, ke malgraŭ tia atesto li ne komprenis la signifon de la literoj, kaj mistero de l' literoj enigmon ankoraŭ forlasas en la mondo.

Post kvin jaroj, en 1918, Dr. Nakanome-Kaku publikigis sian opinion laŭ la studo de la verko de W. Radlof: "*La tombsigno de l' antikva turka frazo en Mongolujo*" kaj ceteraj; "Mi kredas, ke tiuj literoj estus literoj de l' loĝantaro en Ussuri-provincoj, kies lingvo apartenas al orienta tungusa lingvo, sed kiu okupas sin inter du lingvoj Manĉuria, kaj Oroka. Do, mi ĝin volas nomi "Mo-hoŭ-lingvo" (靺鞨語); ĉar mi kredas, ke la literoj en Temija-groto vere estas dokumento de la Mo-hoŭ-lingvo, priskribita per la antikva turka lingvo". Kaj li tra legis jene:

**"Ni akompanante niajn subulojn... transveturis oceanon... batalis... eniras en tiun ĉi groton..."**

La afero, ke la enigma litero, pri kiu neniu ĝis nun komprenis, nun de Dr. Nakanome fine estis solvita, devas esti la plej granda honoro en la scienca mondo. Komprenneble, ni bone scias, ke ankaŭ en tiu fakto ke multaj el scienculoj nun ankoraŭ havas eĉ firmajn kontraŭopiniojn al la kompreno, precipe kun la opinio ke tiuj literoj nur estas signoj, ne estas ankoraŭ difinita kompreno. Ni tamen povas scii ke por tiu enigma litero, de nun



# 失はれた大地 (二幕五場)

Kisaku TABATA

序にかへて——ザメンホフ傳を戯曲の形でつたへたいと言ふ希望は、すでに久しいものであつた。

昨年のはじめ頃からぼつぼつ材料の蒐集にかゝり、漸くにして稿を了へたのが此の五月である。事、志と違ひザメンホフ其のものは到底劇的存在とならなかつたが、併し、此の作品の中では、すくなくともザメンホフが呼吸した時代、エスペラントが誕生した當時の社會情勢の幾分かが窺はれるやうに意企したことを強調したい。

製作のために、忠實や、波蘭の實情を些か無視した點もないではないが、多少の歪曲は止むを得ないこととして諒承され度い。

拙作を生むために御援助を煩はした幾多の同志諸氏ならびに新築地劇團の土井逸雄、佐々木孝丸兩氏に對し、深甚の敬意を表する。

此の戯曲を我等が敬愛するエスペラントの創始者、ラザルス・ルードウィッヒ・ザメンホフ博士に捧ぐ

人——

ルドルフ・ヘメリン ユダヤ人、五十六七歳、年よりも遙かに老けて見える。落ちくぼんだ眼窩に、深い苦惱を湛へた眼。ユダヤ人特有の鼻。がつしりした體格。

ルイザ その妻、ポーランド人、五十一二歳、アパートの管理人、永い間の勞苦を物語るやうな額の小、ブロンドの捲毛に白髪が目立つ。しかし、往年の美貌の面影が残つてゐる。

アダム 其の息子、二十四歳、容貌は母に似て美男子、がつしりした體格、服裝のせいもあるが、ユダヤ人とは見えない。

アレキサンダー・スピナック 小商人、四十八九歳。頭の生え上つた肥えた男。下腹のつき出た重役のタイプ。對手次第で、ペコペコしたり、氣取つてみせたりする癖がある。

セニア その妻、四十二、三歳、似た者夫婦で、氣取やの女、涙もろいが、エゴイストである。

エミリア その娘、二十歳、をとなしに快活な娘、十人並みの容貌。

ザメンホフ博士 ユダヤ系の眼科醫、五十四歳、廣い額、馬の様にやさしい小さな眼、鏡をかけてゐる、胡麻鹽の口髪と頤髪、脊

は小柄な方である。

クララ その妻、五十一歳、小柄な中肉の女。

スタニスラウスキー ロシア人、新聞記者。

三十歳前後、やせぎすな、青白いニヤケタ男。

ヘンリック アダムの友人。二十七、八歳、ポーランドの國粹主義者ビルスキ一派の青年。壯士タイプの男である。

ステファン アダムの友人、二十五歳、溫厚な物腰、學究的な青年。

ロザリア ドイツ系ポーランド女。三十四、五歳のオールドミス、いかつい容貌。

リリー 老いかる女中。

酒場の主人 新聞賣子。スピナックの家の女中、ロシアの將校、兵卒、客一、二、女客、一、二、警官、酒場の女一、二、三、青年、一、二、三、通行人一、二、街の人々。その他大勢。

時——

1914年、7月から8月にかけて、歐洲大戰勃發の前彼。

場所——

波蘭の首府、ワルシャワ。



## 第一幕

## 第一場

デッカ街にあるアパートメントの地階。上手に管理人の部屋、中央、奥に二階へ通ずる階段、下手は往來に面した入口。階段の下手奥は地階の部屋へ通ずる廊下。階段の下に粗末な長椅子が一つ置かれてある。部屋には事務用のテーブルと椅子。少し離れて食卓と二、三脚の椅子。幕開くと、ルイザが机に向つて勘定書を調べてゐる。女中のリリーが入つて来る。

ルイザ リリーヤ。十三號室のヘンリックさんは未だ部屋代を呉れてゐないんだね？

リリー へえ、三週間ばかりたまつてゐますだ。

ルイザ 何時になつたら拂ふ心算だい？

リリー アダムさんにさう申し上げたら、何時でもいゝつて……

ルイザ あの子が、そんな事を云つたの？

リリー へえ、ヘンリックさんとは大の仲好しで御座えますから……

ルイザ (眉をひそめて)ほんとに困つちまふよ。ヘンリックさんなんかと餘り親しくしちゃいけないと、いつもさう云つて居るのに……

リリー でも、あの男を、此のアパートへ連れ込んで來たのもアダムさんで御座えますだ。それを良い事にして、やれ部屋の鍵が壊れてゐるの、番號が氣に入らねえのと、勝手な熱を吹きくさつて、部屋代を出し渋るんで御座いますよ。——何をしてるのか知らねえが、晝寝ばかりしやがつて、夜になると何處かへ出かけて行くから、どうせ無賴漢に違えねえだ。

ルイザ わたしもそう思つてゐるんだよ。——此の節は世の中が物騒だから、ひよんな事でアダムまでがとばつちりを受けたら取り返しが付かないと思つて心配してゐるんだよ。

リリー 全く物騒な世間で御座えますだ。今日も、裏街でユダヤ人の靴屋がお巡りにつかまつて行きましたよ。何でも、キリスト

教徒の子供の生血を吸つたとか云ふ噂で、どえらい騒ぎで御座いましたよ。きつと、その子供衆はクリスマスの晩に生れたに違えねえ。

ルイザ (さり氣なく聞き流して)お前、洗濯物は片づいたのかい？

リリー おうおう、話に身が入つて、うつかりしてゐましたよ。去る。

ルイザは再び机に向つて勘定書を付け始める。入口からアレキサンダーが新聞を讀みつゝ入つて来る。二階へ上る途中、上から降りて來ヘンリックに突き當る。

アレキサンダー 失禮。(ヘンリックを認めて)やア、君かね、ヘンリック君。(行きかける)

ヘンリック 莫迦に御熱心ですね、スピナックさん。歩きながらの御勉強ですか？(笑ふ)

アレキサンダー 君、笑ひ事ぢアないですぞ。愈々戦争だ。戦争がおつ始るんだ。

ヘンリック 戦争と云ひますと？

アレキサンダー 呑氣な事を云つてゐるねえ、君は、……君は先月の28日、バルカン半島で、フェルデナント皇太子が暗殺された事を知らないと云ふのかね？

ヘンリック それが、どうかしましたか？

アレキサンダー オーストリアとセルビアとの戦争は時日の問題だ。愈々ドイツが動き出したんだ。セルビアの黒幕にはロシアが控へてゐる。最後の土壇場はロシアとドイツの衝突だ。あゝ、何といふ不運だ！

ヘンリック (からかふやうに)それが貴君にどんな關係があると仰有るんですか？

アレキサンダー (愕然として)君、君はわしをからかふ心算かね？ 關係があるからこそ心配するんだ、君なんかに判らん。

(新聞を讀む)——6月28日、バルカンに放たれた一發の銃聲は、セルビア對オーストリアの關係をして一觸即發の情勢を醸すに至つた。即ちウキーン政府は、その友邦たる伯林政府に對し、皇帝、フレンツ、ヨセフ一世の名に於て……(二階の方へ姿を消す)



ヘンリックは、その後姿を見送つて哄笑する。ルイザが出て来る。

ルイザ (ヘンリックに近づいて) 今、頂戴に上らうと思つてゐたんですよ。(と、勘定書を渡す)——先月の分が此れだけ残つてゐるもんですからね。

ヘンリック (無難作にその紙片をとり、ポケットに捻じ込んで) 判つてるよ、あとで拂ふよ。

ルイザ ほんとに間違ひなく頼みますよ。何時でもその調子で、ちつともあてに出来ないんですから。(と、皮肉を云つて二階へ行く)

ヘンリックは肩をつぼめ、表の方へ行く、外から、マダムが歸つて来る。

アダム 今日も出かけるのかい？

ヘンリック 今日ビルスキーク氏の演説會だ。君も来るんだらう？

アダム エシリアと散歩の約束があるんだ。そいつが済んだら直ぐ、クラブへ行くよ。

ヘンリック (茶化すやうに) 衰れなる戀の虜よか、ハ……。エシリアさんを、スタニスラウスキーの奴に取られない様に、精々用心しろよ。

アダム (些かてれて) ばかを云へ。それよりも私服がうろうろしてゐるから、表へ出たら氣を付けろ。

ヘンリック なアに、大丈夫だとも。

アダム 昨夜は、リプスキーが捕まつたぜ。

ヘンリック えッ？ リプスキーが？

アダム ストリピン暗殺事件の共犯者と云ふ名目だ。シベリア行きが、又、一人ふえたわけだ。

ヘンリック さうか。……可哀さうだが、祖國の獨立の爲にこれ位の犠牲は忍ばねばならない。ロシアの手を離れて、ポーランドが自由と、獨立に祝福される日は、もう間近かに迫つてゐるんだ。

アダム 今日の新聞でみると、バルカン問題へロシアも一役買つて出るぜ。

ヘンリック うム、愈々我々の活躍する時が來たんだ。ロシア側では對獨宣戰をやる場合、ポーランド人を第一線に立たせやうと

云ふ肚だらうが、さう巧く問屋は下さないさ。

アダム さうだとも、此の機會を利用して、我々は徹底的にロシアを叩きのめしてやらう。さうして、苟くも、ロシアに味方をする進歩黨や民主國民黨の奴らは、片つ端から排撃してやらねばならないんだ。

此の會話の裡に、二階からルイザが降りて来る。

アダム (氣が付いて) ぢア、あとで行くからな。

ヘンリック うム、待つてるぜ。(そムくさと出て行く)

ルイザ (ヘンリックの姿を、見送つてアダムに近付く) お前、此處で何を話してゐたの？

アダム (さり氣なく) 何でもないさ。世間話だよ。(部屋の方へ行く)

ルイザ (その後から部屋へ入つて) アダム、後生だから、お母さんを心配させないで呉れ。わたしには、あの男が何だか良くない事を企らんでゐるやうに思はれてならないんだよ、あいつと付き合ふのはよして呉れと、あれ程頼んだぢアないか。

アダム 御母さんなんかには判らないよ。ヘンリックは良い男だよ。

ルイザ (息子を抱く) わたしはね、お前を愛してゐるの。だから、お前の身に間違ひの無いようにと、そればかりを祈つてゐるんだよ。

アダム (うるさそうに母の手を離して) 判つたよ。母さん。

ルイザ 判つてくれムばいムけれど。わたしはお前ばかりが頼りなんだからね。(珈琲を入れるために立ち去る)

表から、ステファンが入つて来る。

ステファン (扉を開けて) ヤア、居たのかい？

アダム (立ち上つて) お、ステファン！(兩人、抱き合ふ) 何時歸つて來たんだ？

ステファン 一週間許り前だ。

アダム さうかい。随分暫くだつたなア。(腰を下ろして) どうだい？ モスコーは。

ステファン 何處も同じさ。莫迦々々しくつ



て、もう學校はよしちまつたよ。

アダム よした？ どうして？

ステファン 大學と云へば社會主義の巢窟の様に視られてゐるんだ。ロシア政府のスパイが學生の間にまで入りこんで鵜の眼、鷹の眼で僕らの生活を監視してゐる。言論の自由も、ないんだ。そんな窮窟な處で勉強してゐるよりも、獨りで好きな本でも讀んでる方が、よつ程、氣がきいてゐると云ふものだ。ロシアで得た、たつた一つの牧獲は、エスペラントを、覺えた事位ひさ。

アダム エスペラントだと！

ステファン 僕はザメンホフ博士があんな偉い人だとは知らなかつたね。

アダム (肚だゝし氣に) 此のアパートの三號室に棲んでゐる、あのユダヤ人の眼科醫をそんな偉い人間だと思つてゐるのかい？

ステファン ユダヤ人だからと云つて、何も、輕蔑する理由はないよ。トルストイだつて、エスペラントと云ふ國際語の誕生は、人類の文化に光明をもたらすものだと言ひてゐるぜ。僕は、これからザメンホフ氏を訪ねようと思つてゐるんだ。

アダム あいつは、氣の狂つた空想家だ。世界共通の言葉が出来れば、直ぐに世の中が平和になるとでも考へてゐるんだ。ふん、人間の創つた言葉を、何處の世界に使ふ馬鹿がゐるもんか。ユダヤ人の中には、よくそんな大馬鹿者がゐるんだ。實に鼻持ちのならない人種だ。

ステファン むろん、僕だつて思想家としてのザメンホフを高く買ふわけぢやない。しかし、少くとも、言語學者としてのザメンホフは高く評價してもいいと思ふ。君は、エスペラントを人間の創つた言葉だと云つたが、ロシア語にしろ、ポーランド語にしろ、矢張り、我々の祖先が創り出した言葉ぢやないか。僕らは祖先の創つた言葉を愛してゐる。しかし、同時に、民族と民族人種と人種が、平等の立場で使ふ事の出来る國際語が現はれた事は、何と云つても人類文化に一大貢獻をしたものと云はなければならぬよ。

アダム 國際語なんてものは、英語で充分間に合ふんだよ。英語が世界の市場を支配してゐるのは英國の力に有るんだ。波蘭だつて、強國の仲間入をすれば、ポーランド語を國際語にする事も出来る。一人の人間が氣紛れに創つた言葉をとやかく云ふより、長い間ロシアから公用を禁ぜられてゐたポーランド語を研究した方が、どれだけ氣が利いてるか判らないぜ。それが餘つ程、波蘭人らしいやり方だ。あの老ひぼれのザメンホフの奴は、口に平和を唱へてポーランド人の鬭争心を鈍らせ、知らず知らずにロシア帝國のお先棒に使はれてゐる反動分子だ。そいつの尻馬に乗るやうぢや、君もお仕舞さ、ふむ、三年と逢はない内に、君もすつかり變つたよ。

ステファン (むつとして) おい。君は僕や博士の事を反動分子だと云つたね？

アダム さうさ。云つたがどうした？

ステファン 何つ？! (詰めよる)

アダム 我々は、さう云ふ國際主義者が大からひなんだ。

ステファン (辛うじて自制して) 君もすつかりビルスッキーにかぶれつちまつたな。

アダム それが君の皮肉かね？ (立ち上つて) おい、ステファン、歸つて貰はう。君との交際も、これつ切りだ。

ステファン (驚いて) 君は何と云ひ出すんだ。たかゞ意見の喰ひ違ひ位で、お互ひ友達を失ふなんて、ばか氣た話ぢやないか、何かと云ふと直ぐ激して来る、中學時代からの悪い癖だ。

アダム 何も、君から忠告を受ける必要はないよ。君が間違つてゐるか、僕が間違つてゐるか、歸つてゆつくり考へたらいいだらう。(と、ステファンの傍を離れ、真に火をつける)

ステファン、何か言はうとしたが諦めたやうに苦笑し、黙つてドアを開けて廊下へ出る。奥のザメンホフの部屋から、エスペランティストの歌ふ「希望」の合唱がピアノの伴奏にのつてきこえて来る。ステファン、奥の方へ姿を消す。アダムは舌打をしてそれから不快氣に室内を歩き



廻る。ルイザが珈琲を運んで来る。

ルイザ (危くアダムにぶつかりそうになつて) まア、どうしたの? そんなに昂奮して。

アダム 僕は、ステファンを見損つてゐたんだ。あんな莫迦だとは思はなかつた。

ルイザ 話聲がきこえたようだと思つたら、ステファンさんだつたのかい? それでもうお歸りになつたの?(息子の様子をみて) お前、何か言ひ合ひでもしたんぢやない?

アダム うるさい! お母さんの知つた事ぢやないんだ。

ルイザは、その權幕に愕く。アダムはガブリと珈琲を飲み、劇しくむせる。ルイザあはて、その脊中を擦する。二階からエシリアが降りて来る。

エシリア (扉をあけて顔を出す) 今晚は。

ルイザ あら、エシリアさん。

エシリア (むせてゐるアダムを見て) どうしたの、アダム?

アダム (きまり悪氣に) 珈琲のせいで……。

エシリア (笑ふ) あたし、散歩に誘ひに来たの。公園へ行きませうよ。

アダム (氣嫌を直して) あゝ、行くよ、(母に) 一寸出かけて来るよ。

ルイザ いゝとも、ゆつくり行つておいで。御飯の仕度をしとくから。

アダム、エシリアと手を組んで、廊下へ出る。リリーが出て来てルイザと並び、若い二人の睦い姿にみとれる。

エシリア (歩きながら) あたしね、昨夜、夢をみたのよ。

アダム ふム? どんな夢だい?

エシリア どんな夢だか、あてゝ御覽なさい。

アダム 他人の夢なんか、判るもんか。

エシリア まア、非道いわ、判つてよ、あてゝ御覽なさいな。

アダム だつて、言はなきや判らないよ。云つて御らんよ。

エシリア でも、恥しいんですもの。……

二人、戸外へ姿を消す。

リリー (微笑んで) あゝして並べると、ほん

に似合の夫婦で御座えますだ。早く、結婚さして上げたいもので……。

ルイザ もう少し稼がなけりや……。こんな貧乏ぐらしぢやねえ。

リリー 此の頃、スピナックさんの庭へ、若い男が出入りをしてゐるだが、彼奴も、きつと、エシリアさんに氣があるに違ひねえだ。悪いこたア云ひましねえ。早くお貰ひになつた方がよう御座えますよ。

ルイザ アダムはあれで未だ、からつきしのねんねなんだよ。

リリー 飛んでもねえ。お内儀さん。アダムさんは、もう立派な一人前の旦那様で御座えますだ。私が嫁入りをした時なんぞ、亭主は未だ 21 でござえましたが、働き者で私には良く盡してくれました。可哀さうに、連れ添つてまる二年目にぼつくり持つて行かれてしめましたが、其の時の私は氣が抜けた様になつちまつて、食物も咽喉に通らなくなつてしめえましたよ。

ルイザ (しんみりとして) 女も連れ合ひを亡くすと、惨めなもんだねえ。——お前の氣持は、わたしには良く判るわ。わたしだつて、彼の子を抱へて二十年と云ふもの、女手一つで此處まで漕ぎつけて來ただけれど、振り返つてみると、まるで夢の様な氣がするの。——あの子の仕合せ——たゞ、そればかりを祈つて生きてゐたあたしだつた。随分永い月日だつたわ。

リリー その償ひも、今にきつと參りますだ。神様の眼は見通しで御座えますからの。(ふと氣が付いて) あッ、これは大變だ。魚を焼き放しでうっかりしてた。

ルイザ さう云へば、煮げ臭いよ。早く行つて見ておいで。

リリー 年を採ると、忘れつぽくなつていけねえだ。(あはてゝ立ち去る)

やがてルイザは鼻歌をうたひながら、机の上を片付ける。机の上に飾つてあるアダムの寫眞にふと視線をやり、嬉しさうにぢつとみつめる。

ルドルフが表口から入つてくる。疲れた足どり。廊下のあたりをうろうろする。ルイザ、廊下へ出る。ルドルフ姿を認め



迂散臭さうにちろちろ男をみながら通りすぎようとする。ルドルフ、ルイザの横顔をみてハツとする。

ルドルフ (後から)ルイザー。

ルイザ (驚いて振り返る。が、對手を見別ける事が出来ない)

ルドルフ (近づいて)俺だ。ルドルフだ。

ルイザ (鸚鵡返しに)ルドルフ!? (思はず一歩退いて對手を凝視する) あッ——あなた! (對手の胸に飛び込む)生きてゐて下さつたの?!

ルドルフ (しつかと妻を抱いて)生きてゐたとも。わしは生きて居た。お前達の事ばかり考へて……。

ルイザ (無闇に接吻して)まア、こんなにやつれて。ルドルフ、わたしはもう諦めてゐたんです。貴君はもう、此の世に、居ないものと諦めてゐたんです。

ルドルフ わしは刑期の終るのが待ち切れなくなつたんだ。お前達に一目逢ふ爲に、九年前の革命騒ぎの最中、シベリアの曠原を脱れ出てモスコーに辿りつき、其處でほとぼりの醒めるのを待つてポーランドへ入つたんだが、尋ねるお前達は、もうクラカウのユダヤ人區域にゐなかつた。町から町へ、村から村へ、わしはあてども無く流浪ひ歩いた。ワルシャワへついたのは、昨夜の眞夜中だ。今日も空しく探しあぐんで此處まで來ると、美味しそうな匂ひが空つぽの胃袋に泌みこむ。咽喉から手が出る程饑じかつた。……我知らず入り込んで來たんだ。それが、それがお前達の棲家だつた。あゝ、わしは何と云ふ仕合せ者だ。わしは遂々お前達にめぐり合ふ事が出來たんだ。(妻の手を放し、シオンの方に向つて祈る) おゝ、エホバの神よ、正しい審判の神を讃へまつれ……。

ルイザ、四方に氣を配る。ルドルフ、祈り終る。

ルイザ (夫を扶け起して)誰かに見られてはいけません。あちらへ行きませう。

二人、室内に入る、ルドルフ、崩れる様に椅子の上に坐る。

ルイザ 待つてゐてね。直ぐ御飯の仕度をしますから。(去る)

ルドルフ (室内を見廻す、ふと、机の上の寫眞に眼がとまる。彈かれた様に寫眞を手にとる。眼を輝かして)アダムだ。伴だ! (まじまじとみる)

ルイザ、食物を皿に載せて來る。夫が、寫眞をみてゐる様子に、ハツとして立ちすくむ。

ルドルフ (喜びに溢れながら)なんと云ふ立派な男だ。わしの若い頃とそつくりぢアないか。

ルイザ (テーブルの上に皿を置く)苦しい長い月日でしたわ。

ルドルフ よくやつてくれた。有難う、わしは禮を言ふよ。(がつがつと食べる)わしがアダムと別れたのは、あいつが未だ三歳の時だつた。すると、今年は、24 か……。

ルイザ えゝ。(と、答へながら、何か氣にかゝるらしく考へこむ)

ルドルフ わしは早く彼奴に逢ひ度い。彼奴はどんなに 愕くかも知れないぜ。「お父さん」と云つてくれるかな。それとも、子供の時と同じ様に「チャン」と呼ぶかも知れないぞ。彼奴はお前に叱られると、わしの膝下へ駆けこんで來て、「チャン」と云びなで喋る)——だが、わいわい泣き出したもんだ。(夢中が、お互ひに歳をとつたもんだなア、お前の自慢の捲毛もすつかり白くなつちまつた。それにお前も随分やつれたな。(ルイザが溜息をもらすのをみて)ルイザ、お前、顔色がよくないようだが、どうかしたのかい?

ルイザ …… (蒼ざめた顔を上げて夫の顔を視まもる)

ルドルフ えッ? どうしたと云ふんだ。お前はわしの歸つたのを喜んでくれないのかね

ルイザ あなた…… (と、泣き伏す)

ルドルフ (妻の肩に手を掛けて)どうしたんだ。久振りで逢つて泣く奴があるか。さア、こつちをお向き。さうしてにつこり笑つて呉れ。(と女の顔を自分の方へ向けさせる)

ルイザ (ためらつた後)あなた。後生ですか……アダムに、アダムに逢はないで……。



ルドルフ (愕然として) 何だと? お前は何を云ひだすんだ。何故、アダムに逢つちやいけないのだ?

ルイザ 遅すぎたんです。もう、取り返しが付かないんです。

ルドルフ えッ! 何が遅すぎたと。(妻をゆすぶる) 云つてくれ! おい、お前は氣でも狂つたのか?!

ルイザ アダムは貴君の子ぢやありません。あの子の父親は死んで仕舞つて居ないのです。

ルドルフ わしは此の通り生きてゐる。立派に生きてるんだ。

ルイザ いゝえ、シベリアへ流された時、あなたは死んで仕舞つたんです。——わたしとあなたとは、人種を超越して結婚しました。あらゆる障碍を取りのけて、新しい道を築いて行かう——それが、わたし達の希望でした。併し幸福は永く続きませんでしたわ。貴君が背教者としてロシア政府の手に捕はれた時、わたしは、生れながらに背負はされたユダヤ人の宿命をしみじみと感じました。土地の自由も、宗教の自由も、生命の自由をも與へられないユダヤ人——この不當な重荷を、せめて子供に丈はかつがせたくない、アダム丈は自由な人の子として育てゝ行き度い——わたしは、さう、心に固く誓ひを立てました。それから、あの子はユダヤ人では無くなつたんです。アダムは、自分の父親をポーランド人だと信じ切つてゐるんです。

ルドルフ さうか。さうだつたのか。(ぢつと考へ込む)(間の後、再び懇願する様に) で

も、後生だ。ルイザ、一度でいい。たつた一眼丈け、アダムに逢はせてくれ。わしはアダムに逢ひさへすれば、その場で死んでも心残りはない。

ルイザ ルドルフ、お願いです。あの子の仕合せを破壊しないで欲しいんです。あの子には、可愛い、ポーランド娘の戀人があります。わたし達の歩んで來た道を、二度と再び踏ませない様に、どうかあの子達の幸福を考へて下さい。呪はれた荷物はわたし達の手で支へなければなりません。

ルドルフ、言葉なく動揺する。長い沈黙、ルイザ、すゝり泣く。暫くしてルドルフは立ち上り、アダムの寫眞をとつて接吻し、それをポケットに仕舞ひこみ、それから扉の方へ行く。

ルイザ (顔を上げてルドルフを見る。突然叫ぶ) ルドルフ! (追ひすがつて戸口をさへぎる) 待つて下さい!

ルドルフ、黙々と、妻の手を振り拂ひ、廊下へ出る。

ルイザ (尙も追ひすがる) ゆるして。——(泣きながら、紙幣を二三枚ポケットにつゝこんでやる。) ルドルフ、薄情な女だと恨まないで……。か、かんにんしあ……。

ルドルフ (優しく) いや、これでいいんだ。お前に逢へた丈でも、わしは仕合せだつたよ。アダムの事はくれぐれも頼んだぜ。(女を引き寄せて短く接吻する) ルイザ。達者で……暮すんだ。(表の方へ走り出して行く)

ルイザ あゝ、あなた! (二、三步、追ひすがつて立ち上り傍の長椅子の上へ身を投げかけて劇しく慟愕する) くらくなる

(P. 28 よりつづく)

antaŭ ni aperus multaj solvantoj, kiuj eble komprenus en nova vidpunkto, kaj interesuloj ne povas forlasi ĝin, sed cetere, tiu kompreno de Dr. Nakanome, kiel unusola nun en la mondo, jen estas prezentata antaŭ ni:

“Ni akompanante niajn subulojn... transveturis oceanon... eniras en tiun ĉi groton...”

Se ni nun flugigos nian supozon al la pratempo antaŭ 1250 jaroj, jen svarmas antaŭ nia okuloj amasoj da Ĉukĉoj (肅慎民族), kiuj tiutempe ĉe Temija sovaĝa marbordo ploregas en venkita malĝojo. La groto, en 1921, estas gardita de la ŝtato, laŭ la konserva leĝo por la historiaj memoraĵoj.



# 全 國 各 地 報 道

投稿注意:

1. 日本文にて・四〇〇字詰原稿紙二枚以内。
2. 締切大體毎月15日(15日以後到着のものものせることあり)。
3. 地方會誌を以て報道に代ふるをえず。
4. 寫眞は裏に必ず何の寫眞かといふ説明記入の事。  
寫眞は返送せず資料として保存す。

**東京** ★フロント・ロンド——6月27日、月例第二回ピクニークを催す。AESの渡部氏も参加、一同元氣で荒川放水路畔にフロントロンドしてエス語のカルト遊びや河上にボートを漕ぐ等一日を愉快に過した。

★火曜例会——學會の中等講習を了へた新人を迎へ愈々發展、目下作文練習と文法研究。會話練習等熱心な努力を續けてゐる。



フロント・ロンド・ピクニーク

★マルシャード・グループ。相變らず健在なり。學年が改つてから各學部の時間一致せず従つて全會員が集ることは出来なくなつた。然し經濟の者三名は例外なく集つてゐる。用書は引續いて「リングヴオ、ステイロ、フォルモ」の研究、尙副讀本として「悲慘のどん底」も一緒にやつてゐる、兩者とも大體本年中に終る豫定だ。目下7月、8月は夏休みのため中止、9月中旬より再開。

★ノーヴケンシード(會場變更)——例会場白十字が移轉のため當分の間、新宿森永で毎週木曜午後7時より1時間、催す事になりました。

**横濱** 學會横濱支部——木曜例会、毎木曜19時半より馬車道喜久屋フルーツパーラーにて新人を中心に輪讀と會話を續ける

用書 Al Torrents 7月上旬フランス軍艦乗組の同志の來訪あり。

★YMCA-Esp-Grupo——例会毎火、金、19時—21時2階クラブ室にて10名前後。佛軍艦ラモット・ビケの同志を迎へて愉快的會合を持つ今秋の東京大會に備へ新人も古參も頑張つてゐる他地方同志の來訪歓迎。

★Amikino——會場の都合で一時定時的會合は中止してゐるが新人二人に初講を開始した。

**盛岡** 學會盛岡支部——◇例会は毎週水曜日19時半から初講と會話、翻譯と却々多忙。毎回出席4—5名。◇7月10日夜、鐵道盛岡工場の同志から我小坂先生御來盛の通知を受け此思ひがけぬ吉報を受け得た數人が先生を鐵道關係者の歡迎會場から forporti して多賀會館で拜顔の光榮を得た。余りに多忙過ぎる公用の御旅行なので全會員に通知出来なかつた事は残念。◇7月15日50周年記念祝賀會を兼ねて、MER 第三回會話會を川徳デパートで持つ、在京 anoj も手紙で参加。

**弘前** ★弘前エス會——5月21日例会、参加者僅かに4名、その後例会流る。6月6日、幹事會を委員會と改め小松氏宅に委員會を開き會規約を制定す。6月7日、竹館エス會誕生、本會々員木村正義氏(青森縣南津輕郡竹館村新館38)及び成田要作氏はそれぞれ自宅にあつて數名の農村青年に初講を指導しつつあつたが今回協力して上記の會を設立した。事務所は木村正義方に置く。全國同志諸氏の御支援を乞ふ。6月7日—12日初等講習會を弘前和洋裁縫女學校に於て毎夕7時—9時開催、参加者9名。講師は柳田英二氏、用書は「短期講習書」。講習終了後研究會を毎日曜午後柳田氏宅にて開催。用書はザ讀本第2巻。出席者平均毎回4名。6月24日夜、喫茶マスコットにて會話練習會を開く、出席者1000名。



弘前エス會、初等講習會



**札幌** ★札幌エス會——◇7月14日、札幌エス會と共に「小坂猶二氏歓迎並にエスペラント發表50年記念の座談會」を持つ。

冬季オリンピック札幌大會——冬季オリンピック札幌開催決定の報と共に、市民の國際的關心の昂まつて來た際、在札幌同志はこの好機を逸する勿れ！とばかり、二年後を目指して旋風の活動を起すべく、目下寄々協議中であるが、全國の諸兄弟の御協力の程を切に御願ひする次第です。

**帯廣** ★帯廣エス會——◇7月4日佐藤、沼田兩君長谷川君宅へ集合第6回北海道エス大會に關する打合せをなす。◇7月14日今回旭川へ移轉せらるることになった副會長菅沼氏會員井上、長田、兩氏の送別を兼ねてエスペラント懇談會を千秋庵三階に開催出席者17名、丁度滞帶中の原田三馬氏も出席され非常に有意義であつた。◇7月18日佐藤、沼田、長谷川の君原田氏を訪問、現今のエス界の大勢に付座談の後水光園へピクニックをなす。

**桑名** ★桑名エス會——◇例會(五井病院)4月18日加藤「エス週間の意義」出席7名、5月16日5名、6月6日4名、7月4日4名。◇プラモ會(五井病院)5月23日、30日、6月27日、7月11日、スラヴ篇輪讀。◇遠足5月2日、名古屋へVan Hinte 夫妻訪問夜はNESの歡迎會へ出席6名、5月25日Van Hinte 夫妻を迎え、千本松原へ案内夜は歡迎會と座談會、名古屋の白木氏と共に9名。◇講習會、エス週間記念講習會は色々の都合で成績悪く結局最後まで残つたものは5名中1名、然し4月6日より29日まで續行、基礎を終る、女子初講は五井修氏の指導にて5月7日より毎週月水金3回、小室氏宅にて開催、これは三重ドレスメーカー女學院生徒を主とするもの、毎回5—8名、最初はテキストなしで始めたが現在は井上「エス讀本」使用。◇回覽誌“HEL”“La Pramo”共毎月發行、全員の技術向上に大いに役立つてゐる。◇機關誌毎月“Nia Paŝo”(8—16頁)發行、主として日本文にて會員間及び各地方會とし連絡機關としてゐる、“H. E. L” n-ro 2發行、上記回覽誌中より各號1篇の割にて編輯したもの、全エス文80頁各地方會と交換批評を希望、又個人で希望の方は20錢封入御申込下さい(殘部僅少)。

**大阪** ★大阪エス會——例會、會話會豫告通り開催。6月20日佛蘭西の同志

ロツクレー氏來阪。有志9名集つて市内を案内した。展覽會は豫告した期日を都合により變更7月12日より18日の週間平野町ガスビル展覽會場にて開催。來會者計約15,000人、當日はO.E.S.のメンバーが來會者に「エスペラント」の概要並に文法まで一々説明し、相當な成績でした。尙會期中16日には佛蘭西のアダム氏竹内氏同伴にて來阪。會場にも立寄られ夜「ガスビル食堂」にてO.E.S.のmembrojとkunmangiす。談深更に及び感激裡に散會。

O.E.S.豫告——毎週火曜日、谷町四丁目東市民館に於て例會開催午後7時—9時。Privat“Historio de Esp.”研究輪讀。第3火曜日、平野町“Trapezo”にて會話練習會。——夏期短期「エスペラント」講習會豫。8月2日より向ふ1ヶ月間。毎週月、水、金曜日。午後7時より9時まで。堂ビル洋裁學院にて講師、進藤靜太郎氏。會費2圓。申込所、大阪市北區東梅田町28プリミヤハウス内大阪エスペラント會。申込は當日講習會場に於ても受付す。



來阪のバン・ヒンデ氏夫妻

**宮崎** ★學會宮崎支部——當支部主催の初等講習も目出度終了したので會場を事務所杉田醫院内に變更してイソツブの研究に移つた。講師は渡部氏、講習生中宮崎縣立盲學校教諭の河野氏が點字を打ちながら最も熱心に出席せられてゐるのは特筆に値する。研究會は火曜夜ザ博士の演説集の通譯練習をなす。

**奉天** ★奉天エス會——ワルソー萬國大會出席並に其他要務を帶びて赴歐する京都の熱心なる同志、國際時事新聞社長中原脩司氏は7月16日朝大連より入奉、滿鐵々道總局ツーリストビュロー等各機關を訪問、觀光客誘致宣傳に關し懇談するところあり同各機關より多大の便宜を與へられたが奉ビル六



階ダリルにて尾花、北尾、大谷の諸氏と共に記念撮影後、大谷、西村氏等の案内にて防空令が下り燈火管制中の夜の街を詳さに視察、翌 17 日はヤマトホテルにて安部博、峰下氏等と午餐、同午後發のアジアにて同志及び觀光局員の見送を合け哈爾濱經由直行した。尙ほ 17 日附奉毎、奉天、奉日の各紙は同氏に關する記事を大々的に報じてゐたが（奉天エス會）19日附滿日本紙も同様掲載。

## 新聞雑誌とエス

- ★静岡民友新報（6月15, 22日）——國際補助語を採用して世界の指導者たれ——高橋邦太郎。
- ★滿洲日日新聞（7月2日）——鐵道總局より新刊の「滿洲國案内」發行の記事。
- ★朝鮮日報（7月13日）——世界語の誕生日エスペラントの歴史と現況。
- ★早稻田大學新聞（7月7日）——デカルトとザメンホフ——伊井迂。
- ★金剛石（7月15日）……發憤する者は幸福也——山田。夫婦で唄へる歌が欲しい——白木。日本婦人へ。
- ★大阪朝日名古屋版（7月13日）——圖書館綠化に基金を募集。
- ★京都日出新聞（7月12日）——エス語大會へ中原脩二氏の出發記事。
- ★大日本（6月27日）——建國の精神と國際語の理想——露木清彦。
- ★横濱青年（6月號）（横濱基督教青年會發行）——エス語入門、エスペラントの文法。
- ★社會福利（4月號）（東京府社會事業協會發行）——マルセーユ上陸の第1日、池川清。
- ★旅行滿洲（6月號）（7月號）（鐵道總局發行）——綠星世界週遊記——シェーラ記、大谷正一譯。

## 地方會機關誌その他

- ★La Fervejisto（鐵道聯盟）（68號）菊判15頁。揭示と外國語——小坂狷二。車輛術語〔16〕根本。
- ★H. E. L.（北勢エス聯盟）（2號）菊判80頁。
- ★Nia Paŝo（四日市エス會）（6號）菊判16頁。
- ★Forta Voko（北陸エス聯盟）（17號）菊判8頁。
- ★La Elektrujo（Elektro-ESP.-Grupo）（13號）四六倍版 12 頁。
- ★Orienta Kulturo（東洋文史研究所）（4 號）四六倍判 13 頁。

## 第六回北海道エス大會

期日 8月7日（土曜日）8月8日（日曜日）  
 場所 旭川市北海ホテル  
 日程 第1日  
 午後1時30分 神樂丘遠足  
 午後5時 茶話會  
 午後6時 分科會  
 第2日  
 午前8時半 開會式  
 午前10時 大會協議會  
 正午 晝餐會  
 午後1時半 聯盟總會  
 午後4時 閉會  
 會費 大會費 50 錢 紀念寫真代 40 錢 晝餐會費 1 圓 遠足費 20 錢 宿泊費 1 圓 20 錢

## 個人消息

- ★青森より 栗田 正氏來往。
- ★7月14日名古屋竹中治助氏學會訪問。
- ★7月15日學會理事藤澤親雄氏長男壽音夫氏（5月23日藤澤氏軍艦足柄便乘英國訪問中逝去）告別式、學會より三宅史平氏參列。

## 御 注 意

„全國各地報道“へ御投稿の場合は本欄劈頭に掲げたる „投稿注意“ を御一讀の上爲され度し。

（編輯部）

## エス運動後援會貸借對照表

自昭和 11 年 4 月 1 日  
 至昭和 12 年 3 月 31 日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
事業部	906 57	會 費	1593 81
事務費	113 00	雜 益	27 58
雜 費	232 61	第二年度	42 00
銀行預金	354 13	費 會	
振替貯金	38 65		
現 金	18 43		
	1,663 39		1,663 39



# エスペラント運動後援會第一年度會計報告

自昭和十一年四月一日至昭和十二年三月三十一日

幹事 原 田 三 馬

**お詫び** R. O. 四月號に取敢へず寄附金額別による芳名を發表(3月18日迄領收の分)致しましたので引續き3月31日現在にて第一年度會計報告を申し上げる可く準備致して居りました處、昨年暮より幾分身體を害ねてゐた上に少しく無理を致しました爲め四月に入るやどうも思はしくなく遂に勤先も缺勤致しまして四月中旬北上し、旭川市に於て約五十日近い病院生活を餘儀なくされました。後援會の第二年度の活動は既に開始されてゐるので急速に會員の皆様に対し第一年度活動の總決算をして御報告を致さなければならぬと心中一方ならず苦慮致しまして久保貞次郎氏に入院中ではあるが會計報告書を作成するから諸帳簿を送附して戴く様に申しましたが、無理をせぬ様にと御親切なる御忠告に甘へて心ならずも今日まで延引致して居りました。幸ひ6月6日退院の運びとなりましたので早速やらせて戴く事に致しました。貴重なる紙面を私事に使用致しまして眞に申譯なく存じます。何卒事情御了察下さいまして御海容の程願ひ上げます。

**説明** 寄附金額がどの位の額になるかは最初相當に心配した向き々あつたのでありますが御熱意溢れる同志諸氏の絶大なる御支持を戴きまして豫想以上の結果を上げ得ました事を深く感謝致します。

A. さて次に掲げました貸借對照表に依りますと會費總額 1,593.81 の内 1,252.18 を使用致しまして 341.63 を次年度に繰越した事になつて帳簿上は相當多額の金を使用しなかつた如くなつてゐますが、之れは第一年度分として支拂ふべきものが仕切書が〆切日までに參らぬ爲めに次年度拂として繰越した結果でありまして、その主なるものは次の如くであります、

1. ポスター(光は東方より)印刷代 140.00
2. エスペラントを學べのビラ印刷代 82.90
3. 後援會第二年度を迎へての折込印刷代 60.60

合計 283.50 を見越した爲めであります

B. 事務費 113.00 は女子事務員の給料であります、月額後援會 12.00 學會 8.00 と致

しまして學會からも負擔して戴いてゐます、仕事は主として本會の色々の雜務をやつて貰つてゐます。

C. 雜費の主なるものは通信費 138.87 でありまして外に振貯の各會員振込料、切抜通信代(月1.00)、用紙、封筒、印判、文房具、ビラまき代其他であります。

G 會費は3月18日までは既に御報告申し上げました通り 219名、1,534.81 でありまして其後入金致しました分は次の通りであります

- 青島友美氏 5.00
- 速水信宗氏 20.00
- 小野田幸雄氏 5.00 (計 12.00)
- 中川勝八氏 5.00
- 飯田龜代司氏 3.00 (計 10.00)
- 久保美郎氏 5.00
- 生駒氏 10.00
- 熊谷冷光氏 1.00 (計 2.00)
- 後〆氏 5.00
- 合計 1,593.81, 225名であります。

D 雜益 銀行利子 9.13. 概要、代議士意見パンフレット、チラシ賣上代金 18.45 合計 27.58 であります。

E. 第二年度會費 白木欽松氏 30.00, 富森源太郎氏 4.00, 越田重五郎氏 5.00, 新潟醫大エス會 3.00 合計 42.00.

F. 事業部 後援會の仕事として支出したるものを全部この勘定にて整理致しました、この内譯に就きましては R.O. にその都度御報告申し上げました通りであります但要記致しますと――

1. 各新聞社及び外國エス團體へニュースの提供費 22.80
2. 新聞廣告8回(東日、東朝、大朝、讀賣、北海タイムス、北陸日日) 113.50
3. 雜誌廣告7回(改造、中央、日評、文春、現代) 148.25
4. 問合せ書狀ハガキ印刷代 84.10
5. チラシ 16,000枚 27.75
6. エス概要 20,000部 170.90
7. 代議士意見パンフレット 2,000部 46.70
8. 東北、北海道へ特使派遣及旅行記印刷代 47.31



9. 講演會、展覽會補助	95.34
10. 圖書館へエス書寄贈	44.50
誠に簡単な會計報告で申譯ありません、	

御好意を感謝致します。

——12.6.30 帶廣にて——

〔貸借對照表は p. 38 に〕

## エスペラント運動後援會

### 報告 (第二年) 4

#### 7月1日(水)午後9.00-11.00 第4回 幹事會(臨時)

(出席) 小坂、三石、伊藤、酒井、萬澤、  
高木、久保(他に)大崎、露木、岩下、三宅

★7月號、R. O. 誌上で御覽の通り、學會主催で、Zamenhof の詩“Al la Fratoj”の作曲懸賞募集の件につき、提案者であり寄附者である岩下氏の出席を得て、一二回協議した。その結果先號に掲げたやうな決定をみたのであるが、更に一般にこの企てを發表することについて、至急に臨時幹事會を開いた。

この募集廣告は、岩下氏の奔走により、「音樂評論」その他數種の音樂雜誌が協力して、掲載してくれることになり、すでに二三、發表されたものもある。しかし乍ら更に、この計畫を一つの啓蒙的な仕事と考へる時には、一般に廣くこの事實を知らしめる必要がある。それで、音樂家、音樂評論家、音樂記者、レコード會社關係者、放送局音樂關係者等々の個人宛にこの規定を送る。又、全國中等學校の音樂の先生達の中で果して、實際に於いては何%がこれに應募するかは不明としても、間接にはエスペラントに對する興味を起させる機會を與へもことになる。かうした意味で中等學校の音樂科主任宛でも、發送することにしてはとの提案があり、討論の末、可決された。即ち郵送された數は次の通り。

(1) 音樂家等、個人宛	約 1000 通
(2) 音樂團體、音樂專門學校、 新聞社	120 通
(3) 師範學校、中學校、高等女 學校、音樂科主任宛	1450 通
	約 2570 通

これは(1)(2)7月10日、(3)7月15日頃發送された。

#### 第5回幹事會 7月10日(土)7.00-9.00

(出席) 三石、高木、松本、萬澤、久保、  
(他に) 三宅

★久保幹事に編輯依頼中の「文士問合せ」の原稿完成。ところで、返事が57人で、問合せを發した約200名の $\frac{1}{4}$ である。それで、

返事をくれない文筆家で、特に有名な人々に再度返事をお願いすることにした。返事のあつた文士の名は次の如くである。(五十音順)

淺原六郎、伊藤整、宇野浩二、大下宇陀兒、大槻憲二、岡澤秀虎、岡田三郎、岡田禎子、小川未明、沖野岩三郎、加納作次郎、上泉秀信、加藤一夫、上司小劍、川路柳虹、貴司山治、北村喜八、窪川稻子、黒島傳治、甲賀三郎、小牧秋江、佐々木茂索、佐藤惣之助、佐藤春夫、志賀直哉、島崎藤村、須藤鐘一、高須芳次郎、高橋邦太郎、田中純、鶴見祐輔、徳永直、中河與一、仲木貞一、長田幹彦、中村星湖、那須辰造、額田六福、橋本英吉、畑耕一、林房雄、日高只一、日夏耿之介、平林たい子、平山蘆江、福田清人、福田正夫、藤森成吉、細田源吉、堀口大學、眞山青果、水上瀧太郎、宮地嘉六、宮原晃一郎、森下雨村、矢田挿雲、山内義雄。

★學藝新聞廣告、二回に亘つてエスペラント書の廣告(10圓)

★„Al la Fratoj“ 作曲募集の件の中間報告。朝日新聞(7月4日)中央新聞(7月8日)この募集を學藝欄に掲載した。學會宛詳細の問合せの手紙も數通きてゐる。

★オリビツク、萬國博の宣傳對策を雜誌的に種々開陳する。東京市會議員になど呼びかけるのも必要といふ意見が出た。

#### ★第二年度納入會費總計

508.28 圓

現在高 539.93 圓 (7月10日現在)

現在高が、會費總計よりも大であるのは、原田幹事の第一年度の會計報告によつて、御承知の通り昨年度の殘金が繰越されてあるからである。

—— Julio 14, 久保 ——



## 新入荷洋書

D-ro Ing. Eugen Wüster

Konturoj de la LINGVONORMIGO en la Tekniko

四六判 123 ペイヂ 2 圓 20 錢・送料 6 錢

これはおなじ著者のなだかい大著 “Internationale Sprachnormung in der Technik” の縮冊エスペラント版である。工學，特に電氣工學方面における用語の統一を説き，エスペラントがこの目的に最も適合するものであることを明かにした歴史的な名著で，工學關係者，言語研究者の必讀を要す。

## 再着書案内

下記はいづれも好評の名著，しばらく品切れのところ入荷

特價とあるは今回入荷の品に限り，舊定價によるもので，次回から入荷のものは，いづれも 5 割乃至 10 割値上げの豫定です。

最後の機會をのがすな!!

Oppenheim: ORA ŠTUPARO

四六判 280 ペイヂ  
3 圓 30 錢，送料 10 錢

スパイ跳梁，ヨーロッパの外交界を舞臺の國際探偵小説。

Lagerlöf: GÖSTA BERLING

菊判 550 ペイヂ  
特價 3 圓 80 錢，送料 21 錢

雪深く陽光暗い北歐の詩情豊かな新しい古譚。

Bergman: TRA SOVAĜA KAMĈATKO

菊判 276 ペイヂ，深い雪をわけてカム  
チャツカ紀行，寫眞多數，涼味萬斛。

特(上 3 圓 60 錢，送料 15 錢  
價(並 2 圓 70 錢，送料 10 錢

Nordenstreng: HOMAJ RASOJ DE LA MONDO

體格から見た人種論。寫眞多數入り。

四六判 212 ペイヂ  
特價 2 圓 10 錢，送料 9 錢

Homeros: ODUSSEIAS

菊判 300 ペイヂ

特(上 2 圓 50 錢，送料 15 錢  
價(並 1 圓 70 錢，送料 10 錢

萬古不朽の叙事詩，ホーマーの「オデセイ」。

Munte: ROMANO DE SAN MICHELE

特價 3 圓，送料 10 錢

これは一醫師の想出であり，自傳である。興味深い讀物。



## 洋書一部値上

入用な書物は今すぐお買ひください

従来驚くべき廉價で提供してゐた洋書は  
今までとつてゐた仕入方法が不可能とな  
つたため、やむを得ず 5 割乃至 10 割値  
上げすることになりました。しかし値上  
げは新しい入荷品に限り、前に輸入した  
ものは在庫品のあるかぎり、もとの定價  
で提供します。いづれも部数は極めて僅  
少ゆゑ、御入用の品は、この際至急御注  
文ください。

好機は一度去れば再び来ません

新版カタログは切手 3 錢封入お申込み次第送ります

### 舊定價提供品の一部

—— ( ) の中は送料 ——

Bela Joe	犬を主人公のなだかい物語。	上 2.70 (10) 並 1.90 (9)
Dormanto Vekiĝas	Wells 作、未來記。	上 3.00 (10) 並 2.40 (9)
Viro el Francujo	オランダ隨一の探偵小説家の傑作。	3.00(10)
Per Balono al Poluso	この廉價は最後の機會。	特價 5.00(21)
Enziklopedisches Wörterbuch I, II, III, IV	(Kまで)	
	殘部極めて僅少。再入荷の見込みなし。	各冊 8.00(15)
Palaco de Dangero	マダム・ボンパズールの華麗な戀。	2.40 (9)
Mr. Tot acetas mil okulojn	Forge の傑作。	上 1.65 (9) 並 1.30 (9)
Vivo de Arnaldo	ムソリーニの愛弟追憶記。	0.65 (3)
Verkoj de FeZ	フェリクス・ザメンホフの全著作集。	2.70(10)
Teatra Korbo	Baghy の隨筆集。	0.80 (6)
Verdaj Donkihotoj	Baghy の中篇と短篇。	2.00 (9)



財團  
法人

# 日本エスペラント學會發行圖書

—— 詳細内外エス書圖書目錄お申込み次第送呈 ——

定價  
円 銭

エスぺラント捷徑	多少外國語素養ある者のため最良の獨習書…	0.50	6
エスぺラント講座	外國語を知らぬ人のため最良の獨習講義録…	0.50	6
新撰エス和辭典	語數豊富, 譯語正確, 携帶至便…	上 0.80	3 並 0.60 6
新撰和エス辭典	見出語數6萬, 出典明示, 附錄豊富, 印刷鮮明…	2.50	6
新撰エス文手紙の書方	書簡百科辭書の觀, 例文豊富, 四六判 370 頁…	1.20	10
エスぺラント日記の書方	365日, 1日1文例, 社會萬般の生活記録, 譯註付	1.20	9
エスぺラント講習用書	3	エスぺラント短期講習書	0.20 3
エスぺラント初等讀本	0.30 3	エスぺラント中等讀本	0.30 3
エスぺラント童話讀本	0.20 3	イソップ物語 親切明快, 脚註付	0.20 3
ザメンホフ讀本	ザ著作拔萃…全3卷, 各卷 0.20 3	合卷	0.50 6
エスぺラント醫學文範	醫學論文の好模範, 醫學生の講習會に最好適	0.40	3
エスぺラント發音研究	エス語發音上の疑問を氷解す…	0.30	3
エスぺラント文例集	重要語 720 の文例…	0.80 6	カード 1.50 14
點字エス文法と小辭典	6	エスぺラントの鍵	0.05 3
リングヴィ・レスポンドイ	ザ博士の言語上の解答を蒐む必備の書…	0.50	3
國語の擁護を論じて國際語に及ぶ	0.20 3	歐羅巴親類めぐり…	上 0.95 12 並 0.85 12
言語學と國際語	スピリドヴィッチの新言語理論…	0.70	6

## エスぺラント文庫

1. ザメンホフの生涯	0.40 6	3. 世界語の歴史	1.50 9
2. 國際通信の常識	0.50 3	4. エスぺラントの會話	0.40 3

## エスぺラント對譯詳註叢書

1. マテオ・ファルコネ	0.30 3	4. 代理通譯	0.30 3
2. ハイネ詩集	0.30 3	5. 愛あるところ神あり	1.50 6
3. 魔法使	0.30 3	6. レイモント短篇集	0.30 3
エスぺラント童話集	「エス童話讀本」の對譯脚註篇	0.60	6

## エスぺラント文藝讀本

1. スラヴ篇	0.25 3	3. 沙翁悲劇篇	0.25 3
2. フランス篇	0.30 3	5. 北歐篇	0.30 3

## エスぺラント書き文獻

惜みなく愛は奪ふ	有島武郎の傑作…	上 1.00	並 0.75 6
中村精男博士遺稿	原作科學論文, 文學作品の翻譯等…	0.70	6
佐々城松榮遺稿集	原作對話, 翻譯文學等…	0.80	6
綠葉集	伊井迂著原作詩と詩歌俳句等の翻譯…	0.80	6
日本書紀	神代, 神武天皇紀; II 綏靖天皇紀—應神天皇紀	各 1.20	9
ヴェルダ・カルト	6	日本小史	0.20 3
海神丸 野上彌生子	0.40 3	東洋の俠血兒 長谷川伸	0.45 6
骸骨の舞踏 秋田雨雀劇曲三篇	0.40 3	倫敦塔 夏目漱石	0.15 3
佛說阿彌陀經漢譯對照	0.15 3	霧の中 山本有三	0.15 3
日本民族の起源	0.10 3	日本刀劍鑑	0.15 3
大學中庸	上 0.75 並 0.60 6	孝經	0.30 3

東京本郷  
元町・一

財團  
法人

日本エスぺラント學會

電話小石川 5415 番  
振替東京 11325 番



## 第七回世界新教育會議……………新川正一

チエルテンハムで開かれた世界新教育會議とエスペラン  
チストの活躍について、この會議に親しく参加した新川  
氏の報告。

## 巨人ゴーレム……………(名作映畫物語)

猛獸吠えるときゴーレムは蘇る——虐げられたユダヤ人  
のために立つた巨人ゴーレムの姿。これは巨匠デュヴィヴ  
ィエ快心作の物語。

## 眠りと目覺め……………浅田 一

眠りはどうして起きるか。狸寝入りはわけなく見破ぶる  
ことができる。

## その他：前置詞略解……………小坂 狷二

合衆國の長い街道(初等讀物)……………萬澤まき子

Argumenti-Diskuti……………倉地治夫

論文の一節(和文エス譯)……………三宅史平

Paris 生活と同志の好意……………池川 清

エスペラント運動現状 フランス

## 以上は「エスペラント」八月號のおもな内容

定價 20 錢(送料 1 錢)・舊號見本 10 錢

## 「五十周年記念號」(「エスペラント」七月號)

お買ひ洩らしの方はありませんか。残部僅少あ  
ります。至急御注文を

定價 20 錢・送料 1 錢

東京本郷區元町

財團法人日本エスペラント學會

電話小石川 5415・振替東京 11325 番

昭和十二年七月二十日  
ラ・レツォ・オリエンタ(エスペラント研究)第十八年第八號

定價廿錢(送料二錢)

編輯印刷  
兼發行人

法人  
日本エスペラント學會  
右代表大井